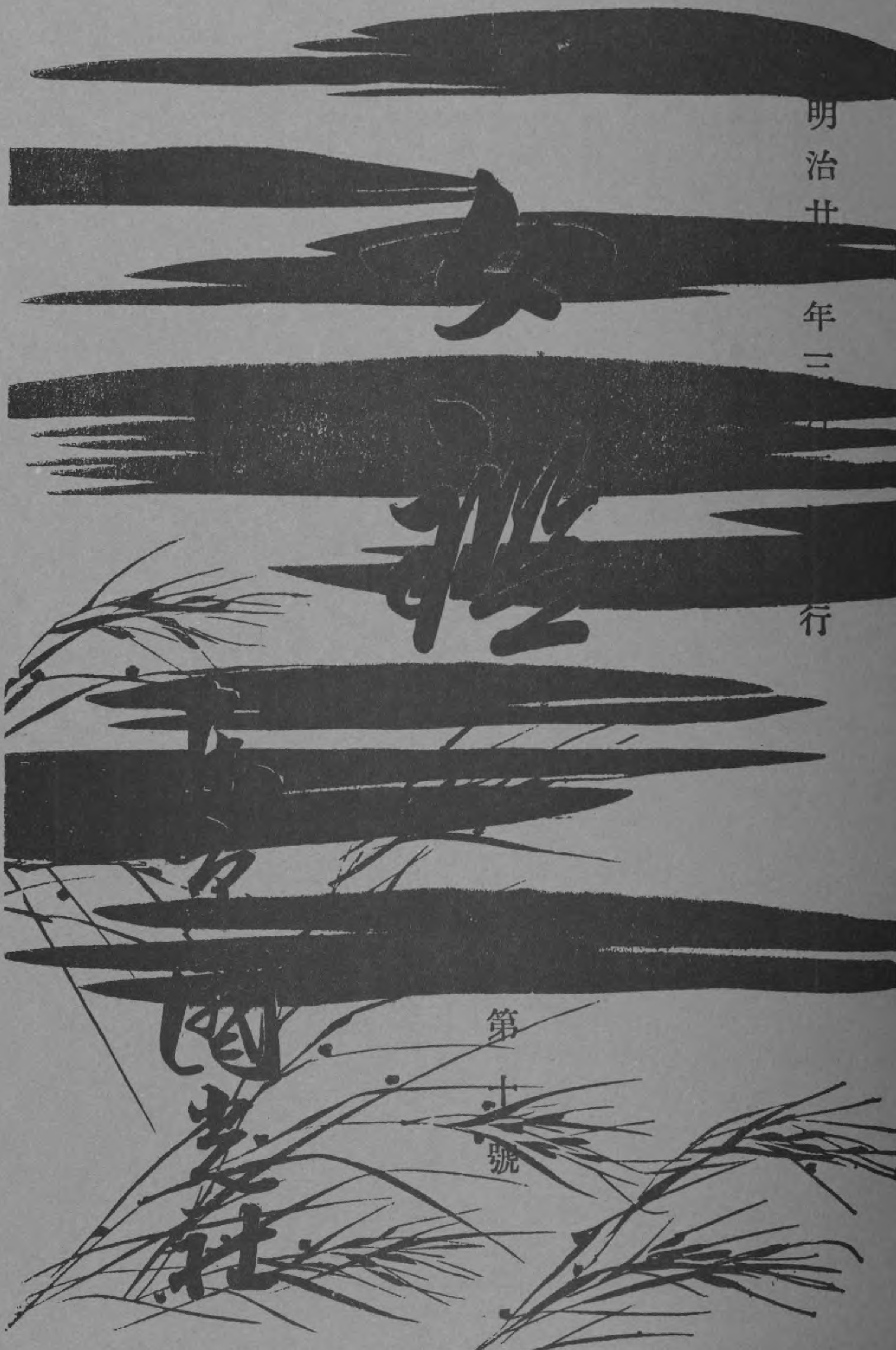

女學雜誌
明治廿
年三
行
第
號

女鑑第十號目次

草香幡梭姫皇女



女鑑

百年の苦樂他人にあり。氏なくして瑤輿に乘る。

「人生婦人の身となることなかれ。百年の苦樂他人にありと。」吟ずれば、誰しも婦人の不幸を憫むならん。「氏なくして、瑤輿を以て送らる」といはゞ、誰しも婦人の幸福を羨むなるべし。その憫むべきは婦人の逆境にして、その羨むべきは婦人の僥倖なり。逆境と僥倖と、孰れも常道にはあらざるなり。

婦人は、婦人の地位と、及びその本分とあり。男子の壓制覊束の下に、屈從すべしと定れるには非ず。況んや、奴僕同樣の辛苦を甞むべきものとなすべからず。婦人はもと男子を補翼して、以て相愛相親の樂境を歩行すべきものなり。

故に人生、婦人の身となることなかれとは、唯その逆境者を憫みたる一時、詩人の感情に出でざるべし。然るを、世間往々口をてゝに藉きて、東洋の風習従柔を以て婦徳となし、終に百年の苦樂を以て、男子の左右する所に任ずるに至ると咎むるものあるに至るは何ぞや。

蓋、東洋の風習には、三從七去等の制あり。又、三界に家なし等の俚諺ありて、その弊として、婦人をして、因循無氣力に陷らしむる過はあるべしと雖、支那聖賢立敎の本旨を察すれば、又大に取るべきものあり。温順柔和を以て婦人天性の普通となさば、暴爲專行は婦人の悖德なり。故に婦人の爲に敎を立つる、當にその天性を基として、悖德を防がずんばあるべからず。之を防ぐに於て、三從七去等の法を設くる、思ふに止むことを得ざる事なるべし。今それ、當今の

男女同權說に比較して、其弊の在る所を察すれば、果して如何。男子を凌侮輕蔑するは勿論、交際場裡の女王を以て自ら任じ、或は醜聲四方に聞え、或は頑然婦德を損して顧みず。之を以て活潑有爲、婦人の本分といふものあらば則止む。然れども、これ婦人の本性を失ふものなり。我が邦にて、古來內事と、外事とを以て、男女職業の區別を立てたる者は、深く男女の天性に鑑みたるものにして、乃ち女は溫柔を以て、性行の基を立てたる支那聖賢の敎と、符合せるものと謂ふへし。由是觀之、彼の詩人が一時、逆境に遭遇せる婦人を憫みたる感情語を以て、直に東洋婦人の上に移して、攻擊の材料となすが如きは、未だ至論と謂ふべからざるなり。

吾人は、嘗て婦人の美といふことに就きて、云々したる事ありき。婦人は婦德

の完成して、性行の天性に合ふを以て美となさゞるべからず。然るを、氏なくして瑤輿に迎へらるゝとは、その容姿の美なるが爲に、不意の尊榮を得ることあるを表する諺語にして、唯容姿艶麗の一點を以て、多くの婦人を誤らしむる言語となれり。見よ。東都、中以下の夫妻が、その子女に對する有狀を。各自今日の生活程度を減少して以てその子女をして、盛粧美飾せしむ。是れ他日瑤輿の期望を、その子女に屬すればなり。婦人容皃の美は、その實、婦人の地位に價直を保たしむる只些少のみ。然れども、一の僥倖を期望するが爲に、絃歌、吹舞の賤民に陷らしむ。惜むべき極りと謂ふべし。板額は醜なりしと雖女丈夫なるに愧ちす。吉川元春は故らに醜女と配す。婦人の尊榮。豈獨その容貌に在らんや。

嗚呼、詩人の感情は、後世徒らに、洋醉者の口を藉く所となり。瑶輿の俚諺は、偶、中以下の子女を誤る。婦女の爲に言を立つる亦難いかな。今日、及、後世婦人敎育に熱心する者、深く立言に注意せずんはあるべからず。蓋、婦人の爲に言を立つる必ずその常道に基かずんはあるべからず。常道に基きて言を立つる、子女をして誤りなからしむるに庶幾からんか。然らば、則婦人の常道とは、如何なるものをいふか、これ吾人の女鑑となすべきものにして、今後逐號論述せんと欲する所なり。請ふ。毎號一讀の勞を垂れ給はんことを。

論説

男女の尊卑

武谷水城

男女の差別を詳にし、權利の本義を明にする時は、其の間に尊卑の別あること、亦言はずして明なるべし、之を東西の史に徴し、內外の實に質す時ハ、隨所に明證を得るものあり、

神代卷に曰はく陰神先唱て曰はく、美哉善少男と、時に以て不祥と爲し、更に復改め巡る、則陽神先唱へて曰はく、美哉善少女と、之れ殆と人爲の業に非ず、男女尊卑の分、自然に定る所以也、人皇の代と爲りて後、年を經る事幾千歲、未だ嘗て此の神訓に違ふ事無し、他なし、之れ人類自然の道なれば也、

禮記に曰はく、男先于女剛柔之義也、と支那開國より今に至るまで四千餘年、未嘗て此の義を變ぜし事無し、蓋妻は齊也、其の貴賤を齊すと迄云へるが如く、支那昔時の風は、決して今日男尊女卑の極度に達して、其の積弊深患を國家の

上に及したるが如き、極端には非ざりし也、
印度上古の風俗、詳ならざるもの多しと雖、婆羅門の敎旨、及佛典の傳ふる處に據れば、女人を卑下せし事、遙に支那の比に非ず、故に國家に影響爲したる障害も、亦支那の上に出しが如し、中古佛敎東漸の影響を受け、本邦固有の女風、亦次第に卑弱に陷りしこと、史を講するもの、認る所也、

此の如く國に依り又時に依り、女性の身分に沿革ありて、其の利害同からず、得失異りと雖、男尊女卑の自然の義に至りては、彼此異る事無し、然れ共、是れ東洋の陋習のみ、以て男女同尊の旨を駁するに足らずと云はんか、請ふ糧を彼に借るを得ん、

舊約全書創世記に曰はく、「ヱホバ」の神曰はく、人は獨なるは善らず、我彼れ

（「アダム」を指す）に適ふ助者を彼が爲に造らんと、又曰はく、汝（「エバ」を指す）は夫を慕ひ、彼は汝を治めんと、

新約全書提摩太前書に曰はく、婦女は凡ての事、順ひて靜に道を學ぶべし、我婦女敎を施す事と、男の上に權を執る事を許さずと、又曰はく、婦なるものよ、主に服ふが如く、己の夫に服ふべしと、

此等の語を搜索すれば、猶二三にして足らざるべし、之を彼洲の古國なる、希臘、羅馬、其の他名國古來の、男女の關係の事實に徵する時は、更に思半に過るものあらん、今此短編に於て、一に其の事實を引證するの暇無し、夫、平等均一を主義と爲し、歐洲中古婦人の權利位置を進るに、與りて力ありたる、耶蘇の敎旨にして、猶男女の尊卑を認め、敎を布く事此の如し、然らば則、一冊

の聖經を手にし、口に贊美の歌を唱へ、傲然として世に獨歩し、男子を淩んと試るものは、獨自己の本分を忘れたるのみならず、抑亦已が奉身捨命爲したる、上帝の罪人と謂ふべし、況んや其の教授者をや、

蓋國に二の王なく、家に二の主無し、國に二王あるは國を成さゞる也、家に二主あるは家を成さゞる也、之を社會學の指示する處に徵し、人間の最初、婦人が如何の地位に在しものなるか、族制は如何にして發達し、又進化爲したるものなるか、其の族制の發達進化に伴ひし婦人の身分の沿革は如何なるか、雜婚は變じて定婚と爲り、掠奪結婚は變して買得結婚と爲り、又化して交媒結婚と爲る事、何れの國何れの社會と雖、此の階級を經過せざるもの無く、内外古今、符を合せたるが如きを見る時は、男女に尊卑の別あるもの、於茲乎、古今に通

し、東西に亘りたる、不易の眞理にして、社會の組織に伴ふべき、人類天然の秩序なる事を認む、（論者あり、自由結婚は本文所述の結婚法の進化して、殆と項上に達し、圓滿と爲りたるものなりと云ふ、其の說の謬れる事、他日に述ぶ、）夫男女に尊卑の別あるは、萬古不易の眞理にして、之れ無き時は、社會の組織は破壞すべく、或は寧ろ成立すべからずと雖、其の尊卑の度を誤るべからず、之を誤るものは、直接にしては一家の不幸、間接にしては國家の衰退を來す事、目前に歷視するもの有が如し、抑支那印度諸國は是れ積極的に誤用し、一向に婦人を卑下し、其の甚しきは婦人を一の器械視して、恰も大古の原人、若くは現時未開の蠻人が、婦女を牛羊と同一視し、男女の間に於て、彼の優制劣服の活劇を目前に演じつゝあるものと、相距る甚た遠からざるが如きもの有、其の

患や深く、其の弊や極れり、歐米諸國中古以前まで、婦女を卑下せし事、殆と東洋と異らず、就中歐洲文明の中心と稱せられたる希臘の如きは、男子生涯、其の妻及姉妹と遊事を共にせず、妻を去るに、支那には七去の制ありて、此の項目に觸るゝに非されば、妄りに去る事を許さずと雖、希臘民政の頃には、夫が妻を去るは心の儘にして、一の制裁ある事無く、只證人の目前にて、妻を家外に出せば事則足れり、結局婦人と小兒とは、男子一般の共有物にして、權理など云ふもの、夢にもある事無りし也、後、耶蘇教の興るに及び、一度其の平等の教旨に化せられ、(耶蘇は婦の夫に服ふべきを說くと雖、自己の心裏に於ては、男女同一にして、彼の天上の樂土に至れは、既に夫婦に非ずして、同一の神使也と說たり、)再ひ一派の學徒の不平より胚胎したる、危激なる天賦人權說

の餘響を受け、其の害の及ふ處、終に男女の職守責任を混し、權利義務を同くし、体格性状を同一視し、教育を一にすべしと云ふに至り、一方に在りては、婦人の微弱を扶助するの精神は、一轉して諂諛と爲り、再轉して婦人の放縦非行と爲り、兩者相合して、結局人倫を破壞し、國家を蠹毒するに至るものあらんとす、今に及て、我邦男女萬年の道を定めんと欲するもの、宜く皮想の見を脱却して、社會の眞相を看破し、眞に國家の前途を先憂するの誠意を以て、事に從ふに非ずんば、百事更始の際、今日毫厘の謬は異日千里の差を來し、臍を噬むも及ふべからざるもの有ん、苟も事に教育の一端に從ふもの、女風の長を海外に取て、國を益せんと欲するもの、我邦女風の短所を矯んと試るもの、女性の位置の卑きを慨するもの、各國家の爲に奮發して、以て其の所志を進取すべ

しと雖、決して、古今を貫き、內外に亘りて、男女異權、男尊女卑、の原則あるを忘るへからず、之を忘れて女風の改良を企る共、之れ猶薪火を救ふに野火を用ゐ、溢血を洗ふに斗血を以てするの愚に等しく、寧ろ舊の儘に委するの優れるに不如、要、舊に泥まず、新に走らず、徐に之を男女の稟賦に質し、其職守責任に徵し、社會に對する位置に質し、以て則を超えざるにあり、

先嫉妬心を去れ

伊藤武壽

世に嫉妬心ほど忌はしく汚らはしきものはあらじ、萬事他人の惡しからんことを希ひて、其の能を猜み、其の過を揚げ、針ばかりの事をも棒ほどに云ひなし務めて人の不利ならんことを欲する心やかて嫉妬にして、天下最惡むべく、卑し

むべき不潔邪僻の欲念は、之に過ぐるものあるべからず。

凡、嫉妬心の原つく所は、その心術の暗くして、度量の狹小なる、氣力の薄弱なるに在り、嫉妬の人は、智識淺く、我か天稟の靈妙なる心魂掩はれて、常に其の光明を失ひ、自他の性狀、事物の大小異同を明むること能はざるものにて、之に次ぐに其の胸襟實に偏狹にして寛宥人を容るゝこと能はず、己を責め、身を謹しむ念は更に無くして、人を咎め他を怨む心のみ強く、加へて其の氣力極めて脆弱にして、他人の材能藝術何呉となく、己に勝る所あれは、我も之を學びて一層其の上に出んとする勇氣なく、到底及はずとして徒に之を羨み、之を羨む餘り、其の狹き胸、暗き心の結ぼれ來れる我利の一念、動く所は忽ち之を忌み、之を猜み、之を謗り、之を傷つけ、さては爲さゞる所なきに至るなり、實

に嫉妬心程世に忌はしく汚らはしきものはあらじ、吾人萬物の長として、眞に其の價値を保たんとする者は、貴賤に限らず男女を問はず、念頭第一先此嫉妬心を去らざるべからず、

人或は曰く嫉妬は惡德には相違なしと雖とも、事情已むを得ざるものあり何となれば原と自他競爭より起るものなれば、強ち咎むべきに非ずと、是れ實に根據もなき妄論僻說にして、誤りの大なるものなり、夫れ人間は謙讓の德を尊ぶべきは固よりなれ共、一方にはまた競爭の勇氣なかるべからず、古語にも人一たび之を能くせば己之を十たびすとは、則ち競爭奮發の思想確きを言ひたるにて、されば聖賢の敎にも志ゞ師にも讓らずといへり、吾人世に立ちて、學問技藝一切の事、他人には寸毫も劣るまじと心掛くるは、實に雄々しき心にて稱す

べきことなり、されば眞の競爭は勇氣なければ爲し得らるべきことにあらず、他人の能を能とし美を美として欲ひつゝ、巳は更に其の上に出んと思ひ勉むるこそ眞の競爭なれ、其の胸の廣きをは大海の如くにて能く衆人を容れ、氣力の勇ましきは古の英雄にも劣らずして之を乘り越えんとするの念ありて、始めて競爭心と謂ふべきなり、故に競爭と嫉妬とは正反對にして、一は勇氣凜々として武士の如く、一は卑々屈々として乞食にも劣り、一は洒々落々として秋天の明月の如く、一は曖昧濛朦乎として曇りたる鏡の如し、而して競爭心の皎潔たるや其れ猶雪の如き乎、人は一日も此の心を有せさるべからず、半時も嫉妬の念を起すべからざるなり。

以上說く所により、嫉妬心の何物たるより競爭心とは反對なることも略明かなる

べし、而して嫉妬心の悪徳にして之より幾多の蠹毒を生じたる事例は、一々説明の勞を取らずとも人能く之を知りたらん。

次に陳ぶべきは、嫉妬の念は如何なる人、多く有するやを明めさるべからず、是れ最も讀者の留意せられんことを祈る所にして、余が此の篇を作すの主眼は全く此に存せるなり。

既に述べし如く、嫉妬は智識淺薄、度量狹小、氣力脆弱の三個より生ずとすれば、世の多數の人は概して之を有せざるものなき程にて、實に慨くに耐へたり、殊に此の心の女子に起ること多きは最も憂ふべきことにて、古昔の聖人賢者、女子の敎を立つるもの之を戒めざるものなし、佛敎にて女子は執念強く疑の心多くして罪深しと言ひ、孔子は女子と小人とは養ひ難しと宣ひしも、之を嘆きたる

に外ならず、其の他我朝の學者先達の書にも、女今川女大學を始めとして、深く疑惑嫉妬の心を戒められたり。」

然れども古の女子は今の世と異り、學問教育の道にも暗きもの數多く、智識の發達も大に劣りたる樣にてありければ、此く言ひたるなるべし、明治昭代の婦人令孃達は、進みたる教育を受け、學問技藝總て男子にも劣らざる程なれば、此かる忌むべき嫌ふべき嫉妬心を有せりなど丶聞かば、大に立腹せらる丶なるべし、之をば知らざるには非ざれども、道德禮義の行は、今日男女共に古の人に勝れりとは、稱し難き世の樣なれば、玆に一般の性狀より陳べたるなり、然れども余は敢て女子にのみ嫉妬心を去るべしと責むる者に非ず、只婦人は動もすれば胸狹く心弱き爲め、他人の能を忌み、彼此誘り合ひて、互に交際の途を

破り、さては舅姑に事へ、夫に從ひても此の如くなるが爲めに、終に一家和合せずして、樂しからざる狀態に陷り、或は嫉妬の爲めに種々なる禍を、惹起すもの少なからざるを見るが故に、我が敬愛する賢婦令嬢に告げて、其の救濟の途を究め、以て女子道德敎育の途上に橫たはれる、一大病根を去らんことを希ふのみ、

史談

草香幡梭媛の御事

三橋要也

草香幡梭媛命は、仁德天皇の御女にして、雄略の天皇の皇后におはしぬ。天皇御性いと雄々しくましまして、御心のまゝに天の下を政ち給へりしが、常は御獵をのみ好ませ給へりき。今しも記し奉るは、葛城山に御獵立たしゝ折の事ぞかし。皇后も

御伴に侍ひ給ひぬ。許多の獵人どもうち列ねて、勢まうに狩り行かせ給ひけるに、遂はれつる嗔猪、ふと草むらの中より暴れ出でつ。大君の御獵の場の猪ならば、這ひも拜みつべきを、負ひつる痛手に心やくれけむ。いとゞ無禮なりしこそ淺ましけれ。此方をさしていきまき來つるに、獵人等は、我を先にと避け惑ひて、木にさへ攀ぢ上るも有りき。かくと見そなはし、武き天皇の御心には、いかばかり口惜しく思しけむ。舍人一人は、さすがに逃げもやらで、いまだ御前に侍ひければ、健氣なりとや見そなはしゝ。「猛き獸も、人に逢ひなば止まりぬべし。それ疾く射留めてよ」と仰せ給ひし間に、猪は益武りて、御前近く暴れ來りぬ。舍人は臆れ心の人なりき。今迄は堪へもこそしつれ。かくと見るより、大御言は耳に入るべうもあらず、同じく傍なりし木に懷きつきて、生きたる心地も有らぬめり。天皇の御前には、早支へつべき人も無し。猪は直に突きかゝりぬ。一足をだに引かせ給はぬ天皇の大御身、危しともいと危し。あはやと見つる一瞬間に、天皇は御弓もて刺き止め給ひ、御足を擧げて蹈み殺し給ひけるこそゆゝしけれ。かくて御獵は果て給ひぬ。無禮なりし猪は、既にその誅を受けつるに、舍人は猶しも命を保てり。天皇の斬らんとし

給ひけるぞ理なる。いかにおそろしかりければとて、大君の邊に死なんことは、日本男兒の望にはあらずや。朝な夕なに事へ奉りし我が君を、獨危きに殘し奉りて、逃げまどひけむ舍人が心よ。事畢へたらば、恥ぢても自死ぬべきを、猶生きたりしこそ憎かりけれ。天皇の斬らんとし給ひけるぞ理なる。舍人も今は爲んすべなし。たゞかなしき獸の一節に、我が身を悔い思ひけるに、天皇は、聞こしめしも入れ給はざりしが、皇后の御心は、いかゞおぼしけむ。固より舍人を惡しとは思ほし給ひけめど、さすがにあはれとも思ほしけむ。やがて天皇を諫め給ひぬ。天皇御氣色いとあしく、「彼が爲に、我が身は殆危かりつ。卿は我が身を思はずして、反りて忠ならざりし舍人を助けんと思はすか」となじり宣ふに、皇后は、かねて思しより給ひしことのおはしけむ。おち居つゝ對へ給ふやう、「妾大御身を愛しく思ひ奉らぬには侍らねど、天の下の國民は、君が御獵に荒み給ふをしも歎き申す者いと多かり。さるを、今また獸の故もて、人の命をさへ召し給はんとす。畏かれども、さては豺狼とやらんの御心なるべし。人は何とか申し侍らん」と、今は身をさへ忘れ給ひて、理正しく述べいで給ひぬ。さばかり武き御性に、許さじと思ひいれ給へりし天皇

の御心は、鬼神も反させ奉る術無かるべく見えけるを、此の御對に、いとゞしく感け給ひて、直に過ちを知ろしめし、乃舍人をゆるさせ給ひ、皇后と同じ御車にて還らせ給ひて、さてのたまふやう、「獵せし者は、獸をかり獲つ。朕はも獨善き言の葉をかり得たり。樂しかりし今日の遊びかな」と、いたくも喜ばせ給ひしが、かくて後は、御獵も殆やめさせ給ひて、專御心を政事に用ゐ給ひしかば、國いとよく治まりきとなむ。

さても、この天皇の御獵せさせ給ひしは、ひとへに御なぐさみの爲のみにはあらず、折しも外國の患しげかりしによりて、もはら兵甲を練らせ給はんとてなりけり。されど、度過ぎぬれば、おのづから、民の累ひ、君の御過ちともなりぬべければ、皇后は、舍人をあはれと思ひ給ふにつけて、そこをしも諫め給ひしものなりかし。あはれ、その一言のことわりに、天皇は、武き御心を反させ給ひつ。舍人は死ぬべき命を救はれつ。天の下は、いやがうへにも治まりつ。その一言のことわりに、

漁商佐左衛門妻いと女の事

片岡正占

今はむかし明和の頃かとよ、若狭國、三方郡、早瀬浦の民、佐左工門か妻にいと、云ふ者あり、舅姑に仕へて實躰あり、佐左工門か家極めて貧しく、常に他郷に行て魚を商ひ、數日家には居されは、いとも又近きわたりに魚を賣て、舅姑を養へり、然るに姑は、先に身退り、今は舅の齢八十に餘て、ことに年頃病はれたれはいとに對ひて、條理なき事のみ云ひけれと、聊もその心にたがはず、又商ひの習ひにて、人は利潤を貪れども、いとは只早く家にかへりて、孝養の事のみ心にかけをれるが、或日外より返りて見るに、狹き家の内、藁を數た取亂して有けれは、我子に問ひければ舅の云ふやう、今日は徒然なれは、子共と共に子を産む狀してたはふれ遊ひぬと苔へしかは、さあらはとて、束ねたる藁二三束以て來て、かくこそあれなと、其仕形してなくさめけれは、舅も興に入りて悅ひけり、又雪深く降りし頃、舅茄子の汁喰ひたしと云ふを心よくうけがひて、近きわたりの寺にゆき、糟に漬たる茄子二ッはかりを乞ひ來りて、川の流れに浸しゝか、酸き味はひも失せ、色も美麗く成りけるを、頓に調して喰はせけり、又ある霜月の末つかた、生魚を好みしに、折柄海殊の外に荒て、漁りする人もあらざれは、おはつかなくは思ひぬれと、たやすき事

とて、少しも否む氣色なく、家の外面に出けるか、はからすも一尺餘りなる魚、いとか足の前に落けるを、是れ天の賜物なりと戴きもちて舅に見せ、望める儘に調して進む、其時隣なる家の屋根を修繕ふとて、三四人はかり登り居りしに、佐左工門か家の上に、一羽の鳶魚を攫みて留り居けるか、いとか家を出るとひとしく、打驚き、魚を落して飛去ぬ、是全く孝感のいたす所ならんとて、人々云ひ合へりければ、領主より明和七年五月褒美して、米をあたへ、其身を終る迄、家の貢をも許しゝとなん、孝義錄

今の世の女子達よ、此いと女の一傳をよく〳〵心をつけてよみ見て、舅に孝養厚かりし事を思ひ給へ、昔、漢國に於て、二十四人の孝子の有し事は、人口に膾炙して、孝子と云へは、此人々を龜鑑として、童等に心を移し見するにあらすや、此いと女は、二十四孝中の三人の心を、一人して兼たるものと云ふへきなり、八十にも餘る舅の嫁なれは、五十はかりにも有りけらし、然るを、舅の心を慰めんと、束ねたる藁取持ちて、小娘仕形を爲して戯れ、恥かしともせざりしは、全く老萊子の孝に均しく、雪中に茄子の汁を乞ひしかは心よく、承諾て、寺に行て、糟漬

を購ひ來て、好める汁に調して喰しめしは、雪中に筍を得し孟宗と同樣なり、又海われて一尾の魚もなき時も、生魚を望みければ、否ともいはて、外面に出れは、忽ち、一魚を得しは、王祥か氷を碎きて、天の賜物ありしと一般ならすや、かくばかり親を思ふ眞心の深きには、神明も感格ましく〳〵て、一魚を與へ給ひしものなるべし、新撰六帖中、右大辨入道光俊の哥に「出羽なる平鹿のみ鷹立かへり親の爲には鷲も取るなり」とあり、此哥の意を思惟るに、ひらかのみ鷹とは、出羽國平鹿郡より出る鷹は、其親鷹の爲には、取得がたき鷲をも取りしと云ふ、故事をよみたるなり、又世諺にも謂ゆる、鳩に三枝の禮、烏に反哺の孝ありとの古語の如く、禽すら如此禮を知り、孝養の道は心得るに、況や人として、その父母を思はざるは、鷹にも劣るものならすやとよまれしなり、あはれ、今の女子等よ入校して讀書、算術、習字、裁縫等の智育に進むも、父母ありてこそ、父母ありても官を置せられ、大中小の學校を設けさせ給ひ、敎師を定め、衆庶の兩親に替らしめて、敎育なさしめ給ふのみか、申すは恐けれと、輦轂の下に於ては、女學校へは、皇后陛下、時々臨御在せられて、諸技藝に勉勵なさしめ給ふ、大慮のつく

波山、葉山しけ山しけきをも、厭はせられす、涵養なし給ふ、君の御爲には、たとへ、女子と雖とも、大江宗秀のよまれし哥の如く、「天の下誰かはもれん日の如く、やふしもわかぬ君か仁慈は」と云ふ意を躰認して、盡忠報國の志は撓むへからぬを、大日本帝國の女子とは云ふべきなり、此いと女、世に有りし明和の昔は、學校の設けとてもなく、殊に早瀬浦の漁民の妻なれは、難波津も知らざりしものなるへし、又舅は實父にあらざれとも、夫の家に嫁し後は、實父母よりも舅姑を大切にして、孝養を竭す其女の道なる、かゝる志の有る者をこそ、たとへ、生所はひなにして文字知らぬとも君子國の眞のをみなとはいふなれ、

家政

育兒小言（九）

下に記るす處は、懷妊中より小兒の人と爲る迄の、母親の心得方の大概也、前に述置し通り、之れには力に關するもの、則体育の基と爲るものと、心に關するも

の、則徳育智育の礎と爲るものとの二ッあれ共、之を各別に述るは煩はしければ、隨所に併せ述む、

懷妊の間の心得方

婦人懷妊する時は、其時より子に對して、母親の義務ある事前に述べ置しが如し、懷妊の重なる徵候は經水の滯止する事にて、其時より二百八十日の後を、健全なる分娩の定期と爲す、則十ヶ月の後也、之を詳に知る法は、最後に經水の渟りたる日より、滿三ヶ月を逆に算へて、之れに七日を加へたる、其同月同日を健全なる分娩の期と爲す　例之ば、一月一日より渟る時は、之より三ヶ月を逆に算へて、前年の十月一日と爲る、之に七日を加ふる時は、十月八日にして、則本年の十月八日を正當なる分娩の期と知るべし、中には數日猶稀れには二十日前後も後るゝ事有、長く胎内にある小兒は生れて後健康なるものなり、又中には定期より三月も早く生るものあり、之れは母親元よりの病身なるか、左も無れば、懷妊中身の保ち方惡しきに依るものにて、此く早出したる兒は、成長爲すも身体弱く、修身不健康のもの多し懷妊する時は、身体の工合ひ常に異りて、健かならず、乳根脹りて痛を覺え乳頭色

を變じて薄き液を漏し、小腹膨れ脹り、臍凸く爲り食物の嗜好を變じ、又は不食にして、或は嘔氣、嘔吐を催し、頻りに唾液を出し、動悸又は頭痛を覺え、氣分重くして寒暑に苦み易し、或は怒り易く、又些末の事に悲みを催す等、皆病に非ずして懷妊の徴候也

懷妊の徴候具れり、醫もまた懷妊たる事を診定する時は、全く平日と境遇を違へたるものと心得て、身心の攝養を大切に爲すべし、第一懷妊中は、凡て心を和らげ、氣を平かにし、一切の想念を去りて、胸の裏の爽かなる事、能く晴れ渡りて一點の雲り無き大空の如くあるべし、或は憂ひ悲み、或は怒り怨み、或は驚き怖れ、又は強く笑ひ、高く謡ひ、或ハ劇しく叫び、又は物を罵り、或は過度に喜び樂む、等の事あるべからず、勤めて此等の感動に出會ふ事柄を避くべし、少しにても邪の心私慾の念を興すべからず、此時小兒胎内に在りて、少しの感覺無きが如しと雖、日を重ね月を經るに從ひ、神經の機關次第に發育爲すが故に母寒を覺ゆれば胎兒も亦之を覺え、母暑に感ずれば胎兒も亦之に感じ、母悲めば胎兒も悲み、母怒り怨る時は、胎兒も亦怒り怨みて、終に其性質を成すものと知るべし、畢竟此間の母親の思念

行爲は小兒生涯の品行の大礎也、
常に行儀作法を正くし坐作進退を謹み凡て婬れたる音樂などを聽くべからす、劇場寄席、其外人の群集する場所に行べからず又世道人心に害ある無益の稗史、小說、杯讀むべからず、暇ある時亦夜杯は、忠臣、孝子、貞婦、義僕、等の事蹟を記したる書、又は行儀、作法、風雅韵事、等の書を隨意に閲し、又は人をして讀ましめて聽くべし、琴を彈き和歌を咏ずる等適宜なるべし、思念を費やすべからず、漢の劉向が書たる列女傳にも、古へは婦人子を妊ては、寢るに側ず、坐するに邊らず、立に蹕せず、席正からざれば坐せず、目邪色を視ず、耳淫聲を聞かず、夜は則瞽をして詩を誦し、正事を道はしむ、此の如くなれば則生るゝ子、形容端正才德人に過ぐと云へり
常に身体を安穩に保ち、手荒き動作を爲すべからず、駈け走り、又は飛び躍り、或は劇しく手足を動かし、或は急に腰を屈め、又は反り、又は重荷を負ひ杯すべからず、乘馬舞蹈を爲すべからず、車に乘る時は、平坦なる道を靜かにゆくべし、七ヶ月に至れば乘車すべからず、尤風雨の日を除く外は、毎日大氣の流通能き場所を撰

て、適宜に閑歩し、又適應の事業を採りて、身体の血行を能くすべし、但疲れを覺えざる前に、早く休息爲すべし、

懷妊中は平時より睡眠を催し易きもの也、充分に眠りて不足なるべからず、但晝間は勤めて眠るべからず、狹き室を鎖て眠るは惡しゝ、常に空氣の流通を能くすべし、

一週間に二三回宛怠らず入浴して、身を清潔にすべし、湯の温度は、華氏の九十度乃至九十四五度迄を適當と爲す、熱きに過ぎ、又冷きに過ぐべからず、入浴中の時間は十五分間位なるべし、懷妊中浴みすれば害有と云ふ説あれども、多くの經驗に據れば、慮るに足らず、但し懷妊の初月には、時として入浴の爲に墮胎する事あり、沐浴を禁ずべし、

女禮式（承前）

有住齊

一神酒いたゞき樣の事

神酒を土器に受て後ち、戴きてのむべし、下を捨てず左の掌に受て、甞むる物也

一貴人酌受け樣

貴人側に銚子と盃とを置き、手自ら酌を取て、酒を賜はる事あり、其時は側近く進寄り盃を取り、敬て酒を受け、すこし退き、謹ていたゞき、盃を銚子のもとに置き、拜禮して立べし

一飯食ひ樣付禁忌の條

膳に向ひ、主人挨拶あらバ、列座見合せ、一同に椀の蓋を取るべし、取やうは、左手にて飯椀の蓋を取り、右手をそへて取り直し、左の方に仰向けて置くべし、此時湯氣のしたゝり落ちぬ樣にすべし、汁の蓋は右手に取り、左手をそへ取直し、右の方に置く、次に坪の蓋を取る、飯椀の如くし、惣て左の物は左にて取り、右の物は右にて取る事と心得べし

先づ飯を食ふ

兩手にて飯椀を取り、左手にすゑ、右手を仰向けて箸を取り、飯椀を持たる左手の、四五の指の間に挾み持直して、二箸三箸ほど食ひ、又箸を指の間に挾みて下より持ち、膳に置き（箸の取りやうは、度毎に斯の如くにて、かはる事なし）兩の手にて、飯椀を置くべし

次に汁を吸ふ
両手にて汁椀を取り、一口二口吸て、箸を取り、粥を二箸三箸食ひ、箸を置き、又汁を吸て膳に置くべし、品により箸にて粥をおさへて、汁を吸べき事もあり
次に飯を食ひ
次に汁を吸ふ
二度目よりは、粥を食ひ、汁を吸べし
次に飯を食ひ
次に菜を食ふべし
菜は本膳の膾より、食ふものなり、左手を突き、膳に置ながら箸にて、皿の端へ挟み寄せ、酢のしたゝりなき様にして食ふなり
次に飯
次に坪
両手にて取上げ、一箸二箸食ひ、汁あらば箸を置て吸ふべし、汁の無き物は、下に置て食ふ事式法なり

次に飯

次に二の汁
右手にて蓋を取り、右脇に置き、右手に椀を取り、左に移し、箸を取り、粥を食ひ箸を置き、兩手にて持て汁を吸ひ右手にて膳に置くなり、

次に飯

次に平
蓋を取り、右脇に置き、右手にて椀を取り、左手にうつし、箸を取て食ふなり、汁あらば、箸を置て吸ふべし中の品を、あれこれと、食かけおかぬものなり、

次に飯

次に三の汁
左手にて蓋を取り、左の脇に置き、椀も左手にて取上げ、右手を添へ、左手に据て、箸を取り粥を食ひ、箸を置き、汁を吸ふべし、

次に飯

次に差粥

箸を取り、少し左へ居向きて、躬を猪口に挾み入れ、猪口を取あげて、食ふものあり、

次に飯

次に猪口

右手にて取り左手に据ゑ、箸を取り食ふなり、是より後は、前の次第に拘はらず、何にても食ふべし、されども、あまり心の儘に、食ふは宜しからず、

次に飯

次に鱠

食はじめの菜にて、食ひ終るを、始終の禮といへり、時宜によるべし、

次に飯を喰ひ、箸を納むべし、

この飯は、少し殘し置きて、湯を受け、香の物を食ふべし、一と口にかみ切れば、齒形見ぐるしければ、二口三口にも食切り、湯を吞むべし、付合せの山椒などは、時宜によりて、箸をつけぬもくるしからず、

臺引、燒物の類、置ならべたる品々を、食はぬは法式とするにはあらざれども、後

世は臺引物も、大海老大蒲鉾の類にて、食盡しがたき者なれば、箸をつけ取りわらさんよりは、時宜により、其儘引かするもよろし、

食の初めに、なますを食は、酢は胸をすかす能あれば、むせばぬ爲の法なり、又汁を吸事も、咽の通りをこゝろむる也、しかれば、兩三度ほど汁に立かへりて、飯を食ふ傳もみえたれど、わづらはし、一度にてよろしかるべし、又本膳に平を組付る流義もあれど、平は元來杉筥の名ごりにて、二の膳に付るが法なり、二の膳なき時は、引おとしにもすべし、又風流の席にては食殘りの品々をあつめてはな紙につゝみ持歸るなどの傳あれども、いやしげなり、つとめてかやうの致はよろしからず、主人の心にまかせて有べきなり、食椀および皿までもぬぐひて置などは、法師のふるまひにて、俗人の法には有まじき也たゞいやしげならぬ樣にすべし、

家内衛生（九）

三笠の舍主人

食物の續き

鷄卵、牛乳に劣らぬ滋養物にて、用法は遙かに牛乳より廣し、黃身白身共に其効力異あらず、其性分蛋白質、脂肪、糖分、及數種の塩類にして、其滋養の力は、鳥肉魚肉の上にあり、特に胃の弱き人、其他總て病弱の人には、亦無二の滋養品とす、生にて食し、若くは半熟にて食すれば最も消化易し、熟煮したるものは消化稍遲し、鷄卵の新鮮なるものは、其頭より、光線に透し見る時は、透明なるも、腐敗に傾きたるものは、曇暗也、又卵の腐敗するは、其殼の氣孔より空氣竄入するに依るが故に、試に水に投して浮ふものは、全く腐敗したる證にて、其次のものは水の中程に漂ひ、新鮮のものは水底に沈む、

鷄卵を貯ふるには、食塩、又は木屑、又は石灰の中に埋め置くべし、或は牛酪、又は外の油を塗り置くも宜し、總て空氣の竄透を防ぎ得れバ、何日立も腐敗に傾くこと無し、

鶩卵、鳩卵、等もまた食用に供すべし、滋養の力は稍鷄卵に劣る、供給も亦多からず、

肉汁、牛肉又は鷄肉の滋養分を浸出したる汁にて、其効各本肉に劣らず、吸收甚だ

容易也、肉食に堪ざる人、胃弱の人、病後の人などには必要にして、特に牛乳を嫌ものには、亦最も貴要の品とす、

以上は日常用ゐる植物性、及動物性食物の大略なり、其細かなる品まで一々述るも必要ならず、但此等の外、醤油、味噌、酢、砂糖、食塩、等の如きものを調食料と云、

味噌は近來の試撿に依れば、滋養の効多く、且胃腸の通疏を能くす、

醤油は味噌の如く滋養多からずと雖、調食料には缺くべからざる要品なり、

酢は適宜に用れば、食機を進め、腐敗を防き、胃腸を清涼ならしむるの効あり、

砂糖は開明國人の助食と爲して多く用う、食物の味を美と爲し、腐敗を防き、滋養の力あり、一時に過食すれば歯を害し、又胃に障る、

食塩は前に述し如く、一日も無るべからざる滋養品の一にて、人の筋肉を堅實にし、物の腐敗を防く、

因に言、我國の如きは周圍皆海なれば、少しも此貴重なる食塩に事缺かず、従て塩の尊きを知らざる人も少からざれども、支那の北部、及中亞細亞地方抔に在て

は、塩を得る事容易ならず、此等の地方にては、深く井を掘り、井の底より塩水を汲み出して、漸く塩に製する也、故に塩より尊きもの少き也、又印度にては塩税とて、英人が非常に残酷なる税を土人日常の食塩に科するが故に、貧民は之に堪へず、食塩を用うる事充分なる不能して、非常に身体の羸弱を來せるもの實に多しと云、此る有様なる故に、貧民は海濱に往て潮の退きたる後、大陽の晒乾して自然に塩分を着けたる沙を窃かに掻き集め、之を洗ひ是を汰して、僅かの塩を得て、此上なき喜びと爲し、やがて刑罰の其後に從ふを避けずと云、是其刑罰の投るべきを知るも、身の生活の爲に塩を欲する事甚だ切にして、罪を避るに暇あらざるに由ると云、曾てマバラスと云地方にて、一の小作人ありて、新に泥土を塗りたる小家を造りて、移り住けるが、其小家の土間に塩硝を點出しありければ、大に喜びて之を掻き集め、其土と塩とを分けて洗ひ、漸く一撮斗りの塩を得て、其庭に晒し置きたるに、忽ち収税官吏の見咎る處と爲りて、告訴せられ、數ヶ月獄に繋がれたる末、數十の鞭罪を科せられ、其塩は官に沒收せられぬ、此小作人の老父、病に臥して在りしかば、思ひ懸なき一撮の塩を得て、喜に堪へず、老父

に進んとて、此くは竊に貯んと爲したる也と云、聞くも毛髮の竪つ話しなり、今日印度土人の身体の弱くなりしは、種々の元因ある事なれども、塩税の爲に塩の需用十分ならざる事、其重なる元因の一也と云、こは本文に關係少き話にはあれども、塩の貴き證と、一には我國人の殷鑑にもと、筆の序でに記すになん、

菓子、種類多きも、大略小豆砂糖米粉糯米鷄卵寒天薯蕷等より製したるものにて、其中に滋養分あるも、所謂一の嗜好品也、中に就て「カステイラ」の如きは良き菓子とす、いづれにても過食すれば、胃の消化を害す、小兒抔は菓子を多食するの慣習を養成せしむべからず、又種々の色素を以て彩色を爲したるものは、害を爲す事あり、注意すべし、

茶事（承前）

藤井行麿

○天王寺屋宗敎三齋侯をはじめて招待せる時、利休同道にて御出あり、此時懷石にから汁を出し、宗及與一郎樣には此汁御存じあるまじ、これは古簾と申汁にて候其故はかけて見苦敷候といへるに、利休かたはらよりさて〳〵堺の恥を御かきにて候

かな、古きすだれをかけてこそよけれ、あたらしきよりはおもしろく候といへり、數寄の分別及と休とはこれはどちがひたりと御はなしありき、

○東山殿は三國一の律儀者ありしが、御臺所天下一の美人にて、何事もおほく御前の意よりなり出しとぞ、日野大納言殿の息女にて、物數寄古今無双このみ者おほし、金襴段子の織もの、塗器陶器類までいろ〳〵新調させ、から物もおほく取寄られ、世間驕者になりしは此時なり、能狂言ことにこのまれ常に見物せらる、若き人達拜領ものなどするも大かた御臺所の意より出たり、細川將監御意に入御太刀持をつとめ、桐御紋二ッ引兩とも給はる、徳光禪師の墨跡、小松重盛殿唐土金渡の軸も此時代の拜領なり、御給仕總司被仰附しゆへ、行幸之式法等も細川家に傳來せりと御はなしなりき、

○持賢武衛のあらそひより起る應仁の亂は、東山殿持賢卿を寵愛ありしゆゑなり、これも御臺所の意より出しとあるが、つひに天下の大亂になりしとおほせられき、

○信長公臺子點茶の手前は、油屋宗及に御習あり、宗及は利休に習ひしなり、公聞およばれ利休を召て臺子點させ御覽ありしに、三ところちかひたるをとはれし時、

利休ひとつにつき三とほりほどづゝ申答へしを、公尤の次第なりと御感ありこれより利休天下に名をなしつひに茶會の中興者とはなりしなり

○紹鷗堺にて茶室を新築したる時、市街地南北の數寄者われも〳〵、其席ひらきに招れんことを心中におもひ待たるに、誰をも招かず千與四郎たゞひとりに明日御茶可レ申といひやる　與四郎かたじけなきむね先一禮をのべ、明日はえまゐらず明後日まゐるべしといふ、紹鷗又使をやりて明日は御出あるまじとのことしからば、明後日はかならずといふ、それより與四郎は使のものを仕立、夜をはしに京都へ人をやり、所にてとゝのひがたき品どもをもとめ、取寄て剃髪し姿をかへ、其約せし日の定刻に出しかば、紹鷗さても〳〵とよろこひて稱賛したりと利休われにかたりたり、此時改名してのちは宗易といへるなり、

○寛永十七年庚辰四月十四日東照宮廿五年忌につき、京都之伶人松木勘兵衞といふ人日光に下るなり、此勘兵衞は京師一の侘數寄なり、三齋君かね〳〵聞およひ寄特に思召、日光へ出立の朝御茶可レ賜よし御申入ありし所、忝むね御請いたし、夜ごみに吉田の邸に來り時刻をまつ、三月下旬の事なり、朝會御茶すみ附薄茶御點な

されて勘兵衛呑めとて御出し、此人喫其まゝ御仕舞、殘りのもの　勘兵衛出立ののちゆるゝ薄茶呑むべしとて道具御取入になる、　勘兵衛御禮申述て出立するに廣間まで御おくりにて、　木曾路をかくいまだ餘寒にてさむからんぞとてかづきて御坐る頭巾をぬぎ秘藏なれどもとて被下、　御羽織を小姓衆に持出させこれも着よとて被下、勘兵衛頂戴して御禮申上出る　それより席にかへり小姓衆へおほせらるゝに、　馬は不自由なるべし宿場まで乘物にて送らせよと仰ありしに、　小姓衆申上るに、　今曉京より乘物にてまゐり候といひしかば、　三齋君ことの外御機嫌あしく侘の數寄を不びんにおもひ馳走せんとはかりしに、　左樣に侘もせぬ奴を呼しけさの茶の會は徒になりたりとて、　のちゝまでも折々御はらだちのはなし有

○藤堂和泉守どのへ、　三齋君伊達政宗君内藤右衛門どの三客にて御出の時、　政宗君御尋に小座御にては何色の衣類をきらひ候やとありしに、　三齋君御答利休は紺色をきらひ候と仰られたり、　又御尋二重筒の花入は上の口へ花を入れ候やとありしに何とも御答なかりし

○慶長のころ世上の取沙汰に、　細川忠興どのは氣せはしき人なり、　蒲生氏郷どのは

天下一のこゝろ長き人なり、これを互に朝夕見られ候はゞ、すこしは直り可申やと、兩家の人ども寄々いひあへり、氏郷どのゝ忠興どのゝ氣短きを見てあれはきびしき事なり、我等はならぬ事といひていよ〳〵氣長くせられたるよし、忠興どのは氏郷どのゝ氣長きを見てさても〳〵氣のながきことなりとて、いよ〳〵氣みじかに成給へりと兩家の人どもかたりたりき、

○千道安朝茶の會をもよほし、三齋君御出曉七ッ時まへ御入のところ、先書院へ御案內いたし、蒲團をあげこにかけていかにも〳〵ゆる〳〵御あしらひいたし、夜明ひがししらみに成て小座敷へ御迎申上、しとやかに數寄をせられしが殊の外樂しみとなりのち〳〵までもかたらせられたり、

○利休切服被仰付堺に下る時、淀にて船に乘る、船場まで忠興君古田織部どの兩人御見送り、兩人乘物の棒を持せられしを、利休の妻よろこび厚く御禮申のべし時、利休いふ日本國の茶人みな知音なれども、此兩人ほどのこゝろあつき人はなしとてねむごろに御いとまごひしたりとぞ、

○利休切服の時撿使にしばし御待給まはれといひて、四疊半の小座敷に入炭を直し

釜の湯のたぎりたる時、しづかに茶を喫し手まへすみて、四尺床に腰を掛すこし脇へ寄たるに臂壁につかへて切にくかりしかば、此置合にてはなしとて床の眞中になほり、介錯の御方御介錯御案内申すまでは御ひかへ被レ下べし、それも舌こはりていはれすは、手を揚て御案内可レ申といひて、短刀を突立引まはさむとせしが、すらりとゆかず、引ぬきてまへのところに立直し引まはして腸を引出し、自在のひるかぎに投かけ、介錯の人に知らせたるよし、七十有三にもなりたる老翁、古今にもこれなき見事の切服なり、太閤殿下も聞給ひのちにはあはれなることとなりしと悼み給へりとか

學園

百人一首和歌の解（つゞき）

井口隆太郎

藤原實方朝臣

かくとだにえやはいふきのさしもぐささしもしらじなもゆる思ひを

戀と云ふものは、まだ始めての事だから、此の様にそなたを戀しく思つて居る事

を、いつそ打ち明けて云はうと思ふけれども、どうも其れさへ云ふ事が出來ないから、そなたは自分が此の樣に焦れて、胸がもゆるほどに思つて居る思ひを、少しもさやうであろうとも知るまい事であろうな、どうかして此の心の中をそなたに知らせたいものである、

えやはいふとは、思ひ切りていふ事が出來ぬと云ふ事なり、其のいふをいふき山といふ山の名にいひかけたるなり、伊吹山は下野の名所にて、其の山にさしも草と云ふ草が生ゆるなり、其のさしも草といふ名に、下の句のさしもと云ふ詞をかさねていひかけたる者なり、さしもしらじなとは、しは助辭にて、さやうともしるまいなあと云ふ事なり、なはかなと同じ辭にて、なあと感嘆の意をあらはせるものなり、

藤原道信朝臣

あけぬればくるゝものとはしりながらなほうらめしき朝ぼらけかな

夜の間はそなたの側に行つて誠に樂しいが、夜が明くると自分の家へ歸らなければならぬから、ほんとうに苦い事である、けれども夜が明くると云ふと、又日が

暮るゝから、暮れたなら又そなたの側に行く事が出來ると云ふ事は、ちやんと知つては居ながらも、矢張別かるゝ時はうらめしう思はるゝ夜あけのころではあるわい、いつそ夜あけと云ふものなくして、いつも〳〵夜ばかりならば、こむな恨めしい思ひもなく、どの樣にうれしい事であるだらう、

右大將道綱母

なげきつゝひとりぬる夜のあくるまはいかに久しきものとかはしる

あなたがおいでのない夜は、實に閨の内が淋しくして、始終ためいきをついて嘆いてばつかり居ります、左樣に嘆き〳〵してたつた獨りで寢る夜の、其の夜あけまでの間は、まあどの樣に久しく長いものであると思し召すか、どうも言葉には云ひ盡くせませんほど、久しくまち遠なるものであります、

ものとかはしるとは、ものとかしると云事にて、ものとしるかと云ふと同じ意なり、

かは、疑問の辭なり、

儀同三司母

わすれじの行く末まではかたければけふをかぎりのいのちともがな

此の樣にそなたと心とけて睦じくして居る以上は、假令どの樣なる事があつても、行く末久しくそなたを忘れて、外の人などに思ひ更ふる樣な事は有るまい、と云ひあそばすあなたの言葉であるが、男の心と秋の空とやらは、更り易いは男の心なれば、どうもあなたの言葉が行く末々までは、賴になし難いからして、此の樣に深切に云ふて下さる今日を限りの、私の命でありたいものであります、命は惜しいものはないけれども、あなたの心がかはりて苦しいうき目を見ようよりか、いつそ更らずして嬉しく樂しい内に死にたいものである、
がなは、希望の辭にて、命にてありたいものであると云ふ意なり、

大納言公任

瀧のおとたえて久しくなりぬれど名こそながれてなほきこえけれ

昔嵯峨天皇此の大覺寺に御座しまして、庭に瀧を落し瀧殿など作り遊して、御覽あつたと云ふ事は、傳へて聞いて居る事であるが、今此の處に來て見ると見るかげもなく、荒れはてゝしまつて、其の瀧の流れて落つる音は、ずつと前かどから絕えて久しうなつて居るけれども、其の有名なる名は今日までも流れて矢張昔の通

りに傳はつて聞えて有る事である、此の有樣を見るにつけても、嵯峨天皇のむかしの御世が、しきりに戀しく忍ばるゝ事である、

此の歌は大覺寺と云ふ寺に行きて、古き瀧を見てよまれたるなり

和泉式部

あらざらむこのよの外の思ひ出にいまひとたびのあふこともがな

此の頃は病氣が次第に重くなつて、心もちが甚だ惡いから、迚も此の世にはもはや長くは生きながらへて居る事は出來ますまい、それ故此の世の外の先きの世に行つて、後の思ひ出しになり、幾らか心を慰むる事も出來る樣に、だうか今一度あなたに逢ふ事が有りたいものであります、何とか都合して來て下さるわけには行きますまいか、

紫式部

めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲かくれにしよはの月かな

年久しく遠く離れて居て、やつとの事に、再び其の人に廻りあつて、顏を見たるは昔の小兒の時の友だちであつたが、其の人はどういふ譯かしらむ、きつと其の

友達で有るかと云ふ事が、見わけも付かぬ間に歸つてしまつた、丁度空をめぐりめぐつてやう〱待ち出でた今夜の月が、充分に見もしない内に雲に隱れてしまつた樣に、あの友達も見えなくなつて仕まつた、實に殘念な事である、ゆつくり逢つて昔話などして見たかつたのに、直に歸つてしまつたとは、あゝ〱殘りをしいことではあるわい、

大貳三位

ありま山いなのさゝ原風ふけばいでそよ人をわすれやはする

おう〱それよ〱、一旦あの通りに深く云ひかはしたのに、あなたの方から見すてゝしまつて鳥渡も來もせず、實に其の心の中が知れませぬ、妾は戀ひしいあなたを少しの間もわすれはしませぬ、朝夕あなたの事ばかり思つて居ますものを此のごろの御樣子のとを〱しいのから考へて見ますれば、あなたの心がどうやらをかしい樣に見えます、

ありま山いなのさゝ原風ふけばとは、攝津の國にある有馬山より、吹きおろす風が其の近邊にある、猪名の篠原と云ふ所の篠の葉におとづれきて、其の篠の葉が

すれあふて、そよ〳〵とおとのするゆゑ、下の句のいでそよのそよと云ふ事にいひかけたる序なり、いでそよとは、おう〳〵それよ〳〵と云ふ意にて、いでは感嘆詞、そよはそれよと云ふ事なり、やはするは、するやはと云ふ事にて、わすれはせぬと云ふ意なり、

此の歌は、久しく中の絶え〴〵になりて居る男のもとより、自分の疎遠なる事はいはずして三位の方を少しうたがひて、此のごろは甚だおとを〴〵しいが、何ゆゑならんと云ひやりたれば、よみて遣られたるなり、

ひろはたの神のみ代にそぐたらより
文てふものはたてまつりける　本居宣長

文學小傳（一）

王仁

難華津淺香

東部に於ける亞細亞の文化は、今の支那の中央、殊に黄河沿岸の地方より開けたりしが、其地に度々の爭亂ありて、之に勝ちしものは其地を領し、勢を失ひたるものは其處に安居すると能はずして、次第に他處に移住するととはなりき。其人民の立ちかはり入りかはるに從て、中央に發したる文化は、漸く四方に波及したり。其中

東北の地方に入りしものは、朝鮮にも徙り、はては我國にも傳に至れり。

抑、我國と支那并に朝鮮との交通は、數千年以前より開けたりと見ゑて、まれには彼我の記錄に載せたるともあれど、其詳なると、今に及びては知るべき由なし。かの有名なる神功皇后の三韓征伐よりぞ、往來も繁くなりて、其事蹟もほゞ知らるゝあり、其征伐の後は、人も知れる如く三韓即ち、今の朝鮮の地を我屬國として、常に將士を遣して、其地を鎭撫せしめ年々朝貢を獻らせ、或は技藝、學術に秀れしものを召し寄せられ、又は皇化を慕ひて歸化するものもありて、我國の開化に益をあたへしこそ多し。

就中、殊に文事に功ありしは、王仁及び阿知使主の二人にぞあるべき。此二人の先祖は支那人にて、即ち其故郷の文化を我國にもたらしゝなり。王仁の來朝は、三韓征伐のありし紀元八百六十年よりはなは八十五年の後にて、應神天皇の十六年なり、其前年に、三韓の一なる百濟より阿直岐といふをして良馬を貢せしめしが、其阿直岐、支那の書に通ぜしによりて、やがて皇太子菟道の稚郎子の師とせられけり。阿直岐、ある時、百濟には巳よりも秀れたるものある由奏せ

しかば、上毛野君の祖荒田別を使として召されける、これ即ち王仁にして、又皇太子の師とせられけり。

王仁は漢の高祖、姓は劉、名は邦とて、一時支那四百余州を平定して王位に即き、其子孫をして四百余年の間國を保たしめしもゝの裔に鸞王といひしが子孫なり。さるに時世變りて其王室も亡されしかば、支那の地にも止まり難くやありけん、王仁の祖、狗といひしものゝ時に百濟に移り、王仁又召に應じて此時我國に來朝しけるなり。

其節に王仁、語論十巻と千字文一巻とを、献れり。是ぞ我國に書籍の傳はりたるとの物にみえし始なりける。論語は支那にて文教の祖とも仰ぐ、孔子の言行を其弟子の纂錄せしもの、千字文は今世に行るゝ周興嗣のにはあらで、其作よりも已前に成りたる鍾繇のなりしならんといふ。さて王仁は是等の書を我國の人に敎ふるに、如何なる方法によりけんか、記錄には其事を傳へず、思ふに此時代にも三韓と我國と、もとより詞は通ぜざりしかど、往來の繁きまゝに、聞き慣れて、互に彼我の詞を知りしもの多かりしなるべし。されど其三韓の語とも別にして、我國の人の聞きも及ば

ざりし漢語、今こそ見なれてあやしとも思はれねど、其頃の人は見も知らざりし漢字にて書きたる書籍のとなれば、教ふる人も、學ぶものも、嘸、互に種々の困難にあひしなるべし。王仁の後、既に千余年をも經て、其間に何百人ともいふべき學者、教育者が、研究を積み、工夫をこらして、漢字の意味と日本の詞とを一々考へ合せて松はまつ、竹はたけ、花ははなとやうに訓を付け、我語法と漢文の語脈とを詳に比べて一二三、甲乙丙などを付けて、讀法を定め、字引を編し、注釋を施し、講説者の爲に、あらゆる便利をつくしたりともいふべき今日にてすら、漢文を學ぶは甚容易なりとは思はれざるなり。ましてやさる便利の少しも無かりし最初の時のとなれば、如何ばかりの難儀をかなしけん、思ひやるにも餘りあるなり。

されど、其困難にも堪へて、研究せし効の空しからざりしにや、數年の後、三韓の一なる高麗より上りし表文の中に、高麗王教日本國とありしがば、皇太子之を讀て大に怒り、其無禮を責め、表文を破り賜ひき。

王仁も亦、日本語に能く通ド、仁徳天皇の即位し賜ひし時に、和歌をよみて賀し奉りき。其歌、

なには津にさくやこの花ふゆこもり
　今をはるへとさくやこのはな
此歌、陸奥の采女が葛城王に奉りし
あさかやまかけさへみゆる山の井の
　あさくは君をわか思はなくに
といふ歌と共に、假名手本に、いろは歌を用ゐざりし頃、即ち醍醐天皇の御代の程までは、手習ひはじめに、まづ書きて授くるとありしとぞ。
王仁は、日本語に通せしのみならず、遂に我國に止りて、永く朝廷に仕へしかど、其沒せし年、幷に年齢は傳はらず、其子孫は、河内國に住み、河内文首といふ姓を賜はりて、代々文筆に從事せり、其一族を稱して西史部とぞいひける。後、天武天皇の八種の姓を制し賜ひし時に、改めて連の姓を賜はり、又更に忌寸の姓を賜りき。又其子孫別れて、淨野宿禰、武生宿禰、厚見連、春澤史、櫻野首、古志連、栗栖首などの姓をとなへしもあり

阿知使主

王仁の來朝より四年後れて、阿知使主來歸せり。阿知使主も王仁と同族にて、漢の高祖の後に後漢の靈帝、名は宏といひし王の子なる延王の後裔なり、是も漢の亡びし後、亦支那の東北に移り、三韓の近傍なる帶方といふに居りしが、遙に我國の事を傳へ聞きて、欽慕にたへず、其子都加使主、女弟子興徳及び七姓十七縣の人民を引つれてぞ歸化しける。やがて大和國高市郡檜前村の地を賜はりて居らしめられけり、又文事に通せしによりて倭漢書直の姓を賜はりけり、其一類を東史部といふ王仁の後なる西史部と共に永く文筆を以て世にたち、或は博士となり、或は史官となりしもの往々史上にみえて、其功績少からず、後世中原氏といひて明法博士となりし家も其末流の一なり。

此後履仲天皇の朝には、諸國にも史官をおき、推古天皇の朝には、支那へ留學生をも遣はさるゝまでに、進歩せしは、もとより朝廷の保護奬勵の力、且は時世の漸く開けしにもよるべけれど、一つにはまた、其最初に道を開き、後進の輩をして據る所あらしめたるものゝ功を深くおもふべき事にこそ。

漫錄

源氏箒木の卷を讀みて

藤井行麿

源氏物語箒木卷しな定の中に馬頭詞をのこのおほやけにつかふまつり、はか〴〵しき世のかためとなるべきも、まことのうつはものとなるべきをとり出さむにはかたかるべしかし、されどかしこしとてもひとりふたり世の中をまつりごちしるべきならねば、上は下にたすけられ下はかみになびきてことひろきにゆづるろらん、せばき家の内のあるじとすべき人ひとりをおもひめぐらすに、たらはであしかるべき大事どもなんかた〴〵おほかる、とあればかゝりあふさきるさにて、なのめにさて有ぬべき人のすくなきを、すき〴〵しきこゝろのすさびにて、人の有さまをあまた見あはせんのこのみならねど、ひとへにおもひさだむべきよるべとすばかりに、おなじくはわがちからいりをし、なほしひきつくろふべきところなくてこゝろにかなふやうもやと、えりそめつる人のさだまりがたきあるべし」といふことあり

おもしろき文章なり、はか〴〵しき世の固め所謂執政、その重任の位置そなはりたるまことの器量者賢才を撰びとりいださむには、容易にはあるまじとうへもなき職掌を言擧し、されどもこれはひとりやふたりして攝政するにあらず、百官諸司に

協議の上、そのよきところをとりて執行することなれバ、上は下にたすけられしもは上になびきしたがひてことのひろきにゆづりあへば、なしやすきところもあらんが、狹き家の內のあるじとすべき人獨りをおもひめぐらすに、云々と大任にむかへて、瑣細なる私家の事務を、重々しくとりなし嚴かなるとにいはれしは、はたらきありてえもいはれず、大小こそ異なれことわりは一ツなり、家刀自として一家の事を委ぬる人なれバ、たらはであしかるべき事種々におほかるなり、「とあればかゝりあふさきるさにてあのめにさてありぬべき人のすくなきを」此詞ハ古歌に、そへにとてとすればかゝりかくすればあないひしらずあふさきるさに、といふがあり歌の意は、ヲオソウジヤト云テカウスレバ又片方ニカヽルヿガアリテヨクモナイ、アヽドウシタラヨカロウゾといふが如し、一ツがよければ一ツがわろく兩ながら全きことのなきを歎息したるなり、古今世のさまはうつり變れども人情は貫徹しておなじきものなれバいまも未來も感覺は不易なるべし「すき〴〵しきこゝろのすさびにて、人のありさまをあまた見あはさんのこのみあらねど、ひとへにおもひ定むべきよるべとすバかりにおなじくはわがちからいりをし、なほしひきつくろふべきところなく心に叶ふやうもやとえり初つる人のさだまりがたきなるべし」好色がましきこゝろの慰にて人の容体を數多見合さんとのこのみにはあらで此人とおもひ定め、妻として家事をうちまかすべき女子を、ねがはくは吾が骨

折をしへなどすることもなく、嫁りて其儘家政をまかすに、萬事よく行とゞきて、こゝろにかなふやうのものもやありと穿鑿して見れば、さてそれはなしと評論せられたるなり、公私につき男子は事業を營み外務にいとまなければ、女子内に在て家事をとりひとり、專斷して百事取まかなふ、是大かたの人の世の常なり、令室の心ゆるむと締るとによりて經濟に損益あれば、會計の任はまことにたられであしき大事どもかたぐ\におはかるなり、然れどもあふさきるさにして人みな一得一失はなれがたく、此撰びにかなふ人は有がたかるべし、男子の外務を内に在て後見し扶助となり、貞實柔和にして親族に睦しく質素節儉を守て世人に吝嗇といはれず、讀かき裁縫さしつかへなく、遊藝のわざも一とほりは嗜み、また割烹炊爨の仕方等もこゝろえて、みづから調理すればとりわけ賓客の饗應あつくなりて、かたはら冗費をもはぶくべし家屋庭中の掃除、衣服のたしなみ粗末の品も垢つかぬやう清潔になし、舅姑へのつかへ育兒の教諭温和にしてとゞき、他交に信義ありて愛敬を稱譽せらるゝほどの淑女は、をさ／＼有がたからん、女癖もとり／＼なるものあるが同此卷の中に、難としてあげられたる一つに「まめ／＼しきすぢをたてゝみにはさみがちにびさうなき家とうしの、ひとへにうちとけたるうしろみばかりをして朝夕の出入につけても、おほやけわたくしの人のたゞずまひ、よきあしきとの眼にも耳にもとまる有さまを、うとき人にわざとうちまねばんや

は、ちかくて見ん人のきゝわきおもひしるべからんに、かたりもあはせばやとうちもゑまれなみだもさしぐみ、もしはあやなきおほやけはらたゞしく、こゝろひとつにおもひあまることなどおほかるを、なにゝかはきかせんとおもへば、うちそむかれて人しれぬおもひ出わらひもせられ、哀ともうちひとりごたるゝに、何事ぞなど、あはつかにさしあふきゐたらんは、いかゞは口をしからぬ云々」とかゝれたり、いまもかゝるたぐひの人なはあるものなり、まめ〳〵しきすぢは誠實をひたむきにして、耳はさみがちは鬢の髮の乱れかゝりたるを取も繕らはず耳に狹むなり、びさうなきいへとうしは美相なき家刀自にて、さのみ容儀もよからぬ妻女の、身のなり振もかまはず、衣類の洗濯

はり綴り、また炊爨のわざなど鬧がしげにはたらき居て餘念なく、夫の外交おほやけわたくしの出入につけ、喜怒哀樂の日ごとに轉り變ておもしろく愉快なる日もあり、また苦々しき事のみありし日もあり、時には腹だゝしき事なども有て、さて吾いへに歸たる時まづ妻に其ありしやうをかたり出るに、ねむごろに聞とり其情をくみわけ、偕によろこびともになげき腹立しをりなどはとりわけほどよくいひなし、夫のこゝろを慰れば、怒氣もまた散じてならぬ堪忍もなり、積欝もはれて思案のかはるものなり、さるを余所にきゝながし其意に應せず、不通氣にしてたゞおのがおもひよれるうち〳〵のことなどいひ出るは、たよりなくなさけなきおもひ出せられぬべし、近くて見む人のき

きわけ思ひしるべからんに、かたりもあはせばやと歎息せらるゝにつけ、心におもひあまることなどおはかるを、誰にかはきかせんとおもへばなさけなきこゝちして、わらひもせられうちそむかれてひとり言もいはるゝなり、さるをり何事ぞなどいひてあはつかにさしあふぎゐたらんは、まとに口をしききはみなるべしかゝる情に疎き人もをりには有ものなり、鈍きも敏きも生の賢愚によて有べけれど、幼兒よりの教育親々の身の行ひよりして、そのこゝろしらひせざれば、瑕なき玉のみめづるはえがたかるべし、

（以下次號）

楢の舍哥がたり　富田馬太

定家々隆等の、哥人として仰がれし時に當りて、女流に名高かりしは、俊成卿女宮内卿などあり。俊成卿女は、幼きより敷嶋の道に志厚かりしかば、その効むなしからず、實物の詠感情の吟、共にその骨を得しものなり。大事の晴の哥會などは、この人を待ちて、一段の光榮を添へしとかや。京極入道の家は、實にこの女のために、益々その名聲を高めしものなり。その哥風を一言の下に評して、稍巧奇に過ぎたりといふ者も有らんか、これ甚その謂なきことなり。何となれば、當時哥は優に物あはれにかまへてよむべしとは、一般の思想なればなり。この女、哥をよまんとては、まづかねて古集どもをくりかへし〳〵、よく見とほし、火かすかにともして、靜に打案せし由、長明はいへり。これ恐らくは、哥合などに出すべ

き時の用意なりしならん。さればにや、その哥どもを見るに、詞といひ、意といひ、何れも古人のよみおかれたる故事によくかなひて、過は甚少かり。建長年中に、田家月といふ題にて、さ夜すがら月ぞ山田の庵はもる風になるこはひく人もなしとよみしを、さ夜すがらいかゞと難ぜられしこと有り。實にこは聞きなれぬ詞なり。白壁の微瑕にや。或人は、この女の哥風を評して、風躰こまやかに面白き様なり。萩をみなへし、花さきみだれたる野邊の夕ぐれに、むしの音を聞くとやいふべからんといへり。小野春雄は、貫之をまねて、皇太后宮大夫俊成卿女は、あはれなるやうにて、まことすくなし。哥のさまつよからぬは、女のしわざなればなり。いはゞ李夫人さゝゝて、九花の帳夜しづかなるに、魂きたれども物いふことなかりしが如しといへり。新古今に、梅の花あかぬいろ香もむかしにて同じかたみの春の夜の月、あこかれてねぬよのちりもつもるまで月にはらはぬ床のさむしろ、續後撰にはかなしやたのめばこそはちぎりけめやがてわかれもしらぬ命に、と有るなどを、それらの評にあてんには、さもあるべし。誠を基とするよりも、詞の婉あるを高しとせし時あれば、たゞこの女のみを、魂來たれども物いふことなかりしが如しなどいはんは、大人氣なきことなるかし。かの春戀にて、おもかげのかすめる月ぞやどりける春やむかしの袖のなみだに、山花を春はまた花の都となりにけり櫻にゝほふみよしのゝ山などは、何れもその調よくとゝのひ、吟詠

の際甚その氣高きを覺ゆ。

前回に出だせる二女の哥は、何れも太田道灌のあるべく思はる。一は細川勝之に、短慮不レ成レ功といふことを、いそがずばぬれざらましを云々と、書きおくられしものにて、一は梅香入レ枕を、人ならばうき名やたゝん手枕に夜な〳〵かよふ梅のにほひはとよまれしと、大同少異のものなれば、此所にその出所をたしかむ。さても入道は、たび〳〵盜難にあはれしものかな

（つゞく）

貝原氏女子十三條の教誡

忍舍の主人

貝原益軒翁か、教育の事に深く心を用ゐたるは、普く世人の知れる所なり。こは翁が、世の女子のいまだ嫁せざる前に、其父母たるものゝよく〳〵教へさとしおくべき事どもを、懇にかきつらねたるものなり。翁は、古語に人よく百萬錢をいだして、女を嫁せしむる事を知りて、十萬錢をいだして子を教ふる事を知らず。といへるか如く、世の父母は子を教ふる事を知らず。と歎きけり。文明の世は、百萬錢を出して子女を教ふる人々も出來たれど、百萬錢を出して教たる女は、中々に古風の教へざるに如かず。と恨みかこつ親たちもありときく。これ果して誰の過ぞや。世の女子を教ふる道にわたる人々は行くさきます〳〵心して再び世の親たちをして、教たる子の教ざる子に劣れり。その歎聲

を發せしむること勿れ。

女子の嫁する時、かねてより父母のをしふべき事十三條あり。一に曰。わが家にありては、わが父母にもつはら孝を行なふ理あり。されども夫の家にゆきては、もつはら舅姑を、我二親よりも、猶おもんじて、あつく愛み敬ひ、孝行をつくすべし。親の方をおもんじ、舅姑の方をかろんずる事なかれ。舅姑のかたに朝夕の見まひをかぐべからず。舅姑のかたのつとむべきわざ怠るべからず。若舅姑の命あらば、つゝしみ行なひてそむくべからず。凡のこと舅姑にとひて、そのをしへにまかすべし。舅姑もし我を愛せずしてそしりにくむとも、いかりうらむる事なかれ。孝をつくして、誠を以感せしむれば、彼も亦人心あれば、後は必やはらぎて、いつくしみある理なり。二に曰。婦人は別に主君なし。夫をまことの主君と思ひて、うやまひつゝしみてつかふべし。かろしめあなどるべからず。凡婦人の道は、人にしたがふにあり。夫に對するに、顔色ことばつかひ慇懃にへりくだり、和順なるべし。いぶりにして不順あるべからず。おごりて無禮なるべからず。是女子第一のつとめなり。夫の教へいましめあらば、其命にそむくべからず。うたがはしき事は夫にとひて、其命をうくべし。夫とふ事あらば、たゞしくこたふべし。其いらへおろそかにすべからず。こたへの正しからず、其理きこえざるは無禮なり。夫もしいかりせむる事あらば、おそれてしたがふべし。いかりあらそひて其心にさかふべからず。

それ婦人は夫を以て天とす。夫をあなどる事かへすぐ\/あるべからず。夫をあなどりそむきて、夫よりいかりせめらるゝにいたるは、是婦人の不徳のはなはだしきにて、大なるはぢ也。故に女はつねに夫をうやまひおそれて、つゝしみつかふべし。夫にいやしめられせめらるゝは、わが心より出たるはぢ也。三に曰。こじうとこじうとめは夫の兄弟なれば、なさけふかくすべし。又こじうとこじうとめにそしられにくまるれば、しうとの心にそむきて、わが身のためにもよからず。むつまじく和睦すれば、しうとの心にかなふ。しかればこじうとの心も亦失ふべからず。又あひよめをしたしみむつまじくすべし。ことさら夫の兄よめは、あつくうやまふべし。あによめをば、わがあねと同じくすべし。座につくも道をゆくも、へりくだりおくれてゆくべし。四に曰。嫉妬の心ゆめ\/\/をこすべからず。夫婬行あらばいさむべし。いかりうらむべからず。嫉妬はなはだしければ、其けしきことばもおそろしくすさまじくして、かへりて夫にうとまれすさめらるゝものなり。業平の妻の、夜半にや君がひとり越らん、とよみしこそ、誠に女の道にかなひて、やさしく聞ゆめれ。およそ婦人の心たけくいかり多きは、しうとをつとにうとまれ、家人にそしられて、家をみだし人をそこなふ。女の道において、大にそむけり。いらたつことあらば、おさへてしのぶべし。色にあらはすべからず。女は物ねんじして、心のどかなる人こそ、さいはひも見はつる理なれ。五に曰。夫もし

不義ありあやまちあらば、わが色をやはらげ、聲をよろこばしめ、氣をへり下りていさむべし。いさめをきかずしていからば、先しばらくやめて、後にをつとの心やはらぎたる時、又はいさむべし。夫不義なりとも顔色をはげしくし、聲をいらゝげ、心氣をあらくして、夫にさからひそむく事なかれ、是又婦女の敬順の道にそむくのみならず、夫にうとまるゝわざなり。六に曰。ことばつゝしみて、多くすべからず。かりにも人をそしりいつはりを言べからず。人のそしりをきく事あらば、心にをさめて人につたへかたるべからず。そしりを言つたふるより、父子兄弟夫婦一家の間も不和になり、家内をさまらず。七に曰。女はつねに心づかひして、その身をかたくつゝしみまもるべし。つとにおき夜はにいね、ひるはいねずして家事に心を用ひ、おこたりなくつとめて、家をさめをりぬひうみつむぎ怠るべからず。又酒茶など多くこのみて、くせとすべからず。淫聲をきく事をこのみて、淫樂をならふべからず。是女子の心をとらかすものなり。たはぶれあそびをこのむべからず。宮寺などすべて人の多くあそぶ所に、四十歳より内はみだりにゆくべからず。

藻塩草（承前）　楢の舍主人

一女は、たかきもいやしきも、親の家にあるはすくなく、他の家に嫁して、人の親をおやとし、夫にしたがひて、身を終るものあれば、そのとつぐる家のしうとしうとめを、生の親とおもひ

奉り、つねに孝行をつくし、よくその家をおさめて、夫妻むつましく、一門家來もやはらぎとゝのふ樣に、心つかひ肝要なり、かくのごとくにして、こゝろよくゝらせば、生の親への孝行、この上は有るべからず、いかにうみの親へ孝行なるとても、しうとしうとめの心にかなはず、夫むつましからず、家事とゝのはざる時は、うみの親悅ばざるのみならず、心をなやまし、氣をくるしましむるなれば、不孝これより大なるはなし、我親への孝行は、夫の家事をよく治むるにつくるとおもふべし、

一しうとしうとめへは、心を盡して孝行なるべし、おきふし衣食、その求にしたがひ、こゝろばせを見去りて、心にかなはんことを思ふべし、下々のまじはりは、しうとしうとめも、或は一つ家にあり、たとへ家居へだてたるも、みづからかるくゆきゝして、むつびかはすほどに、つねのよしあしもあからさまに見え、衣食おきふしの孝行も、つとめやすげにぞおもはゆる、中より上の人は、おやかたといへども、各めしつかひことにして、住居もかくべつに、衣食もそのさだめ有り、されば下ざまのやうに、かゝる筋にて、よめのてづからみづから、つとめつかふまつるべきしなもすくなし、たゞ心ざし誠をつくし、すける事きらへること、よくわきまへて、おやかたの心安らかに、安おんならんことをおもふべし、もとより衣食おきふしにも心を用ゐて、病あらば心身の勞をいとはず、かりそ

めにもあなどりかろしめまゐらせず、我心をゆだねて親がたの心をやすんじ、もの事こゝろよく思ひたまふ様に、つとめ行ふべし、めしつかひもよく申しつけて、よろづのこと、まづ親方を先とし、かりにもしうとめのよしあし、うはさ評議などいたさせず、何事も心ばせ誠ありてつかふべし、

いかにわれ孝行になし奉るといへども、もししうとしうとめの心かたましくて、その孝行をうけたまはず、われをにくみそしり給ふ時はいかゞせん、かゝる時は、大かたそのたがひを夫につげかたりて、わが心をはらし、かくては身もつゞかずなどいふほどに、夫もつまに心ひかれて、親をうらむる心出來、われさへしうとめの御心にかなはぬのみならず、後には夫まで不孝人になすたぐひ世に多し、これ不孝の上の不孝なり、いかにかだましき姑なりとも、よめの心に眞實まことの孝心ありてつとめ〳〵ば、岩木にあらぬ人ごゝろ、遂にその悦を得ざらんや、われをうとみそしりたまふは、いまだ及ばざる所ある故とおもひかへして、身をかへりみ心にはらたちへだつべからず、いかにしてか御心にかなひ、その悦をうべきとのみ思案して、つねにつとめ常につゝしみ、かりそめにもかげ言に、しうとめのよしあしうはさいふべからず、ましてや夫にかたるべからず、かくのごとくつとめつゝしみ、誠の心あつくつかへ奉らば、あしき姑あるべからず、只いつまでもわれにあ

たりのあしきは、わが誠の心いたらぬ故ぞと、身にかへりみる心深かるべし、

またいかにしうとしうとめの心にかなひて思ひ侍るとて、女のあるべからぬすべあしき事、又は夫の心にかなふまじき事などを、とりもち行ふは、これ却つて孝にあらず、すけることときらへる事、その品によりそのことにより、時にもよるべきものなり、よのつねにさまでの事もなきものあれども、深く心を用ゐるには、ちかくさしあたることに、むねせばからじと、かくまでも書きつけ侍るなり、

もし夫と姑と不和にして、つねに心よからぬ中に出合ひたらば、誠に女の不幸、いづれにつけても、一かたの心にかなふべからず、よめの心くるしかるべき大事なり、しかれどもよくつとめて、夫むつまじからば、むつまじき筋よりつねにとりなしをもいたし、姑へは孝行をつくして、夫の心にかなふまじきこゝろの外のことは、心にまかせぬ誠をつくして、双方やはらぎむつまじかるべき事を、心にねがひつとむべし、夫によりての舅姑なれば、まづ夫の心にかなひて、むつまじくなれ心はへをも見しりたらば、きゝ入るべきすぢをよく考へて、次第に親かたともむつまじく和合あるやうの了簡こゝろを用うべし、かやうのことは千變萬化にて、かき盡しがたき事なれば、たゞあらましを申すなり、

一夫につかふるは女のつねなれど、よくつとむることのかたきにや、むつまじきは、なれすぎて

夫をあなどり禮にそむき、うときは、そむきて家の内とゝのはらず、多くはしつとのみちより、常にもだへ長くゝるしみて、人をもそこなひ家をもやぶり、身はこの世の外までもあしき名の殘るたぐひ、めづらしからぬためしども、あさましき事なれば、女のよく心にしめて、つゝしみまもり、つとめ行ふべきは、この道にかぎれり、されバくりごとを書きならべ侍るべし、

一親の身上、夫の身上、高下によらず、女はたゞ、夫を天なり、主人なり、やしなひ親なり、とおもふべし、

一農工商の上は、わが家にあらねば知らず、もののふの妻としては、もつぱら忠孝を思ふべし、つねにわがつまの、主人に忠あり、親に孝あり、名正しく道行はれて、子孫はん榮せんことを願とすべきあり、されば朝はとくおきて、身しまひはやく、いさぎよくして、夫のつとめにいづるに、をこたりなからんことを心とし、衣類食時、手まはしよくならはし申しつけて、さしつかふることなき樣にいたす事 かん要なり、又常々たはぶれ、深く朝寐をこのみ、酒宴に夜をふかして、家人をいため、勤にいづることをものうくして、つねに奥にのみ引き入れ、たはぶれ語ることを好むは、夫の身をそこなひ、家をそこなふ女といふかし、さればとて、源氏物語帚木の巻にいへるごとく、吉祥天女とならびたらんやうに、ものがたく愛きやうなく、または忠孝仁義などいひたらん、世にくげなるへき

なり、夫の身もち心ざしをよく見知り、その心にかなふ様に心がけ、うらやかにうち向ひ、むつまじくともなれ過ぎず、夫の武業勤事、家法のみだれざらんことを思ひおのづからよろしきほどに、眞ごゝろにつとめつかふべし、夫もとより誠ありて、身もちほどよきにかなひつる人ならば、女の幸なにかこれにしかん、たゞそのをしへをまもり、さし圖にしたがひて、身もち心もち、日々にあつく誠をつくして勤むべし、

あらひはり

笠雪子

第五回

一村數十家の菩提寺の住持翠翁和尚といふは、村中の人の尊敬厚く、少し紛紜の事などあれバ、村長の孫兵衛殿よりも、先づ和尚様に話した方が早解りするといふ程にて、況してその御説教を聽聞して、幾多の爺様婆様は隨喜の涙を目に湛へて、和尚様はこの世ながらの佛様とぞ難有がりける。この翠翁和尚俗姓は松山にて、其二男は松山空翠といふ、兄はこの寺を嗣ぐべき身なれども、空翠はこれより一本立ちにならねばならず、かつは當今の世は在昔と違へバ、出來るだけは彼に學問を仕込

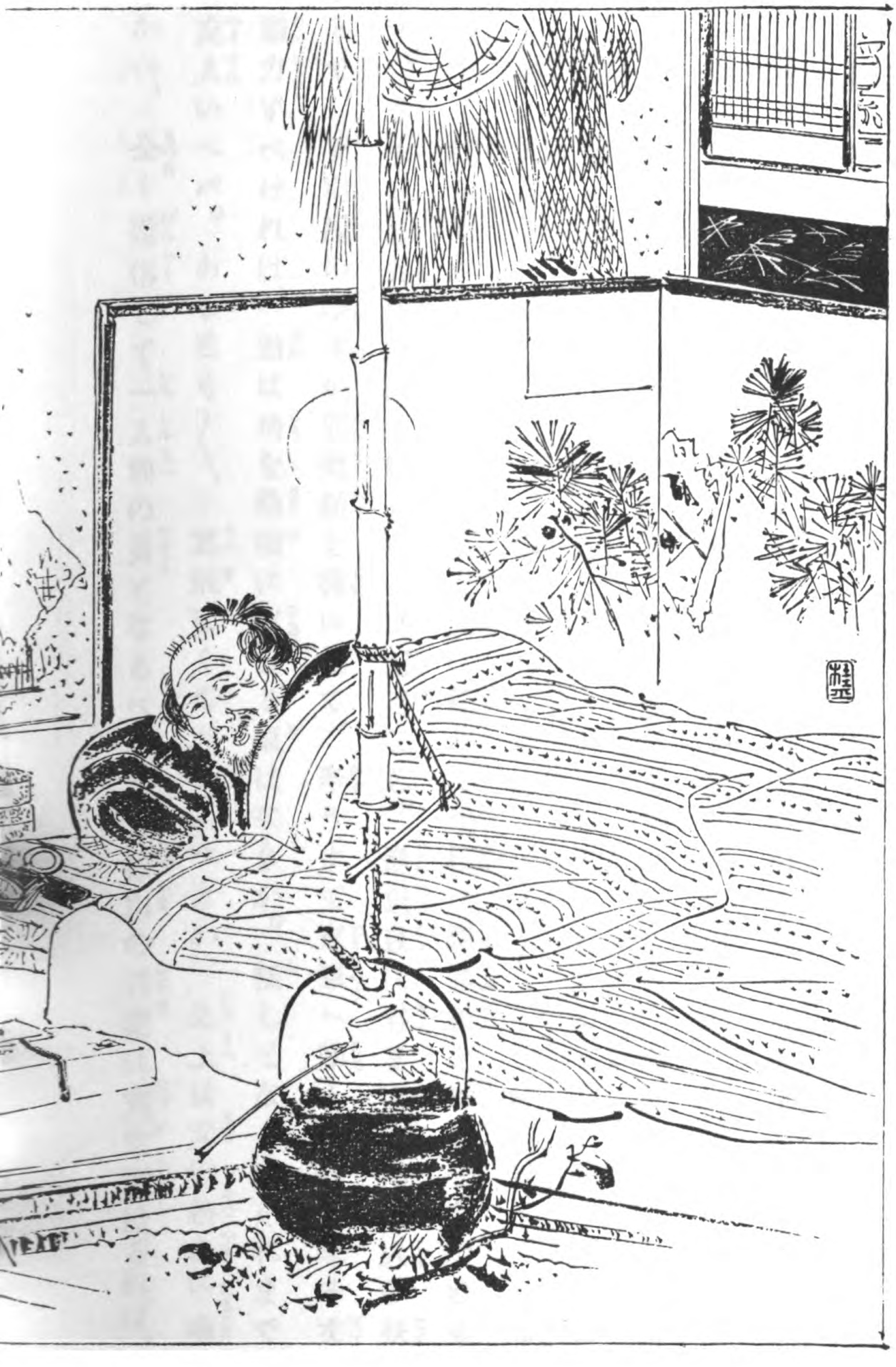
むべし。彼も萬更の愚物でもなく、村中よりも才子と呼ばるゝ程なれば、親の慾目からか知らねども、何樣やら末がたのもし、兎も角も學問をと、空翠を京都へ遣りて、其宗の學校に入れぬ。

空翠父の意を受け、師の敎に從ひて一向專念に學問修行、大乘小乘の極意を悟りて見事大智識となり、世に行はるゝ他敎の邪正を辨じ、同校生の中に一頭地を出さんず心組愈固く、同校生に兎や角言はるゝも、馬の耳に風の取り合はねば、彼は畸人變人にて濟みぬ。かゝる事半年許なりしが、白絲は如何なる色にも染み易く、少年の情ば物に移され易くて、畸人變人と呼ばれし斯程の空翠も、忽ちに風流男となりたるぞ是非なきの世や。

春は花いざ見にごんせ東山、七重八重に咲き出でたり櫻の花に鬱を散せんとて、清水觀音堂のあたりを徘徊ひし一日、友禪の振袖に西陣の帶をしめ、翳す扇に夕日をうけて、花の下に立ちたる京女郎の、いとも艶なる容姿に魂を奪はれ、其身も其所に茫然として立つに、松山の目にも彼花麗はしく見ゆるかと、同伴の者の戯言いひて背をポンと打つに、何となく嬉しく覺え、祇園精舍の入相の鐘、此日よりは如何

しても寂滅爲樂とは聞かざりし。それより後はしのぶの亂れ限り知られず、同校生の二三人其道に委しきものと申し合せ、夜々竊に祇園町の花を尋ね柳を問ひて遊ぶ程に、月々の學資は何時の間にか無くなるは當然の勢、窮して濫ありといふまでにはあらねども、往々同校生に迷惑をかけて、以前の松山の氣性は影だに見えず。半僧半俗のぬらくらものとなりて、あはれ學校より退けられけり。

下宿屋の二階に、二月も三月も閉籠り、食料席料を拂はゞこそ、湯錢も乏しき始末なれば、髮も髭も延びに延び、垢は遠慮なく日々に殖え顏色は蒼白となりて此世より餓鬼道の人なり、抹香の香も、伽羅の香も何處へやら〳〵。嗚呼我誤てりと本心に立返りて懺悔すれども其時遲し。友人に賴みて學校に謝罪書を差出せしかども許されず。さりとて此儘故國に歸らんには面目なし。進退茲に谷まりしが友人の扶助によりて、下宿屋の亭主が閻魔顏を後に見て、辛うじて東京へ來りぬ。出來る丈は我も盡力すべければ、君は功を桑楡に收むる氣はなきか。無しとならばそれまでなりと友人いへば。あるとも〳〵、其氣なくてかなふべきか、此上は元の松山に魂を入れかへ、全く還俗して一人前の男となるべしと、松山の言葉に實意顯はるれば、





友人も世話甲斐ありと思ひて。それにて松山なり。今の一言決して忘るな。

松山還俗したれども名は故の如く空翠。或夜學校の漢學の敎授に雇はれ、僅少の月給にて其生計をつけしが、それも不如意勝ちなり、かつは出身の都合もあしければ、如何はせんと思ふ打柄、不圖よき手蔓を得て、同國人の好より太田家に入り込みて、書生となりにけり。松山これより萬事に氣をつけ、いと正直だちて働けば、殿樣奥樣も調法がられぬ。

さてもお松は蓮葉者にて裁縫などやうの、女の知らでかなはぬことは大嫌ひにて、物見游山殊に芝居の談話となれば、何事もそこ除けにて、相手かまはず贔負の俳優の事を思ふまゝに饒舌るが常なり。二三年前の事とかや、惡しき名を立てしが、邪も正といひくろめて、うま〳〵と其事を知らず顔にてすましぬ。其浮氣今もなほ絶えずして、松山が書生となりし當座より、それと思ひ込みし一念を徹さんとて、時々松山に其仕打を見すれども、彼はそれを悟りたるか、あらぬか、いつもいろ〳〵の事に紛らして避くれば、お松いよ〳〵いらだちてけり。お松お花をこのごろよく思はぬに、松山の事よりしてさま〴〵の邪推をめぐらし、時々お花が松山と親しく

談話することあるを見て取り、さては如此かと自分勝手の判斷を下し、お花が不在をよき機會とて、松山お花の身の上につきていとも不名譽なる事を奥樣に私語きけり。

寒紅梅

中村花瘦

其一

美濃三河駿河甲斐と國々へ、放し鳥の間牒が音信を待つに、尾州は相手に取りて不足と誰人も眼を附けず、血腥き風筋安土を避けて、雨なす鏃明の星の鎗刀は、外へ降り他處へ晃めくと安心の胸を叩いての注進。火焔を吐く毒蛇も睨まへねば、風を起す猛虎も牙も嚙まず、いざや方々日頃顰めし眉を開らき、痛めし胸襟を擦るはこの時こそ。晒らせし麻糸の亂れたる世に生れ來し哀しさは、今日諸共に膝を抱へて睦まじく語りても、明日は兜の忍び緒ふッつと切つて、伽羅焚き籠めし亂髮の生首敵方の大將に見參するも知れぬ身なれば、人の云ひける遇ふを別離の時も嘘言ならじ、暫時弓は袋に睡まり太刀は鞘に治まる間隙を竊み、互ひに笑ひ興じ合うて、死

際の名殘惜しからぬやう、又日々に鍛へ上げしこの腕この毛脚も、敵なき獨角力にさぞや疲れ果てけん、邂逅には骨も休めてやらずば、野晒しの案山子弓矢待ちし儘に朽ちて、今こそと云ふ場に臨み、名乘り上げたる一番鎗の姓名も、筋の凝結肉の痩弱に思はぬ好き敵を打漏らすことのなきとも云へまじ。心斗りのこの宴筵、山の罕も海の珍らかは羅列ずも、主人が胸の信實を汲み分け、武者草鞋に踏み破り給ひし戰爭場の偉功話を肴として、一酌の醉を買ひ給へば、折柄の饗應この上の幸福はあらぬものをと、今日の主人織田勘十郎信行が挨拶に、招かれし老強漢若殿原の面々が式代終るを潮時、早や禮に初まる酒は土器に注がれて、銚子一坐を順に廻りぬ。

程歷て出でし燭臺の蠟燭、半分は心も燃へて殘餘は淚繁く、端坐まる膝の頭を人の見ぬ間に摩で、白扇に欠伸無殘々々と殺す人あるを見れバ、この酒宴も是れ迄と勘十郎信行坐敷の右より左と斑點なく見廻し、莞爾笑みて居住居正しく少し聲高に方々と呼べば、彼方此方に上る頭は不倒翁、欠伸鼻より密と迯がし弓引く眞似の欠呻も可笑しく、勝負附かずの腕押しは、後日に赤澤山の怨憤も殘さで、何事ぞと一坐

等しく主人の顔を眺むるに、信行膝頭手平に一ッ鳴らし。さして招き申せし程の饗應も仕得ず心外に存せしに、ことなう興せられて勘十郎が喜悦この上もなし、折から興も漸々覺め頃と思しければ、主人が此處に一ト肴參らせんに、それにて今一度酌み直し給はんは如何にと、醉心に舌も硬らず云へば。この上の饗應は望まねど、折角の誠實を雲井の烟掻き消さんも心ならず、酌めども盡きぬこの場の興に任かする長居は、主人が迷惑の種とこそ覺ゆ、云はるゝ一ト肴にさつと引き上げ、逃ぐる敵にだら〳〵追の酒は心ある武士のせぬ處と、半白髮の老漢が音頭に連れて、百千鳥異口同音答ふるを、信行連けざまに合點き、許すとある賓客の仰せにすがりて、さらばその肴見參に入れ申さん。無禮なる振舞と咎め給ふなと念を押して、扇を腕の支柱に身體延し上げ、遙か末座に引き下りて酒宴の相伴に與かる、家の老臣どもの一ト團結を微笑やかに眺め。津田や居る、八彌はそれに居か是れへと腮で招くに、はッと答へて座を立ち、跪むる腰に兩手膝迄下げ、摩り足さら〳〵と疊を嘗て主人が前二た疊ほどに座り、信行が顔仰ぎ見し儘何事も云はず平伏すれバ、八彌近く進み候へ、是處へ〳〵と扇をもて膝近く指示せば、八彌その心を得て互代りに右左の

膝頭に歩み、頭を計りて再び平伏す八彌が脊を越して座中を見渡す信行、賓客達、このものは早や知らせ給ふ如く、勘十郎が愛臣津田八彌にて候。是を肴にとは可笑しき話なれど、招き申せし客人を媒助に頼み參らせ、此の者に妻一人持たせたしと思ひ候、日頃の親しさに甘へて勘十郎平に頼み入ると述ぶるも待たず、腹に有る酒は興ある言葉の春に温まりて、媒助とは戰場の魁と違ひ、身不相應の役なれど頼れつるを引くも武士の本意にあらず、武骨を承知とあれば高砂唄ふ咽喉は持たぬも、劔の舞に千代を祝はぎ申さんと云ふ、誰か知らぬ割れ鐘聲にどつと笑ひて一坐自然と崩れ掛る。

八彌今聞く如く方々も云はるれば、信行媒助して取らするに、妻一人持つ心はなきか、八彌は平伏したる首を僅かに擡げ、仰せ不束な身に取り難有く覺え候へ、言葉を返し奉る恐はあれど、是は固く辭み奉ると云ふをこれと打ち消し、歷々の方々又この信行の媒助が心に逆ふての謝絶か、勿体なきことを仰せられます。されば聞かん、誰人も一度は持たで叶はぬ妻を何故に嫌ふか、定めし譯のあらうに是處にて精らに述べよ、少し不興氣に膝を進むれば、譯とて別に有るにても候はず、未だ若

年の八彌、君の恩命に酬い參らする御奉公も、よしなき足手まとひの出來なば、忠義の心知らぬ間に鈍り申やとの懸念と云ひ掛くるを被ぶせ。其の懸念も其方の身に取らば道理まだ、年若といへば强ては勸めねど、さらば約束固めて年の來るを待たば如何に、よも是れにては不承知はあるまい。ハッと俯向く八彌が姿に、したり顏の信行。まだ不承知かと重ねて云へば、恐れながら不知承。何に。不束ながら八彌は、君がお召出しのその時より、命は既に棒げしものを、殊には無事泰平の時と異り、三河の德川美濃の齋藤、駿河に今川あれば甲斐に武田の候、今こそ暫時無事とれ云へ、隙を隙をと覗ふ最中なれば、何時戰爭の初まらぬとは申せず、その時こそは非力ながら八彌、君の威光を兜の菊坐に戴き、精忠無二の魂魄を尺延の刄に籠めて、御馬印の元に命を捨る格期に候。されバ今日ありて明日は知れぬ陽炎の吾が命若し討死も仕候へバ、例令約束迄とは云へ、若き女子を一人孀婦と致さねバならず。あたら開かぬ寒紅梅の蕾、そよとの香も立てず闇に散らすは八彌が忍びぬ心、恐れながら不承知と申は先づ斯樣の譯、無禮過言は君に盡さん心からの誤と、幾重にも御免をと谷川落す苔淸水。瑩ゝと淸く淀みなく、誠心顏に顯はれて義理明らかに陳

べ立れば、一と打水に坐中寂寞と靜まり、織田の家の柱石はこの八彌ありてこそと、互ひに見合す顏は物言はねど、感せし心は眉目の間に顯はれ、掌當つる咳も坐中に響きて大きく聞こゆ。この金石の言葉には信行も流石にと見れば、苦々しげの眼元に八彌を屹度睨み、靜を破る聲は雷霆のそれならなくに、口賢く云ひ廻はせど流石は若年ものよ、その舌の根にては天晴れ忠臣と聞ゆれど、馬前に討死するをのみ忠義と心得、武士の爲す事と思ふハ愚か。信行が眼目に群がる草の間より撰り上げ、織田の族姓ある津田を名乘らせしは誰の恩ぞ。討死なして果もすれば八彌そのものゝ忠義は立て、殘りし津田の姓は捨つる心なるか、津田の姓は定めし大切にせでもよきといふ心なるべし。諺にもあるごとく主從は三世と云ふに、その深き恩を一世に捨てゝ臣たる道は盡せしと思ふハ、そも發明ものと云はうや。左程忠義一徹に思ひ入らば何故その身死せしのちに、二代の忠臣を殘す心を持たぬ。才智は年に勝てず長からぬ言葉ながら、次第に解き破られたる八彌は、擡げし首次第に重く垂れ、兩の手の裏に額の汗を流して、蛇に見込まれし蛙の身動もせず。まだこれにても兎や角云ふやと重ねて信行に口を開かれ、二の矢引く心も失せ。殿の仰せ通り如何樣にも

と答ふる聲は、流石若氣の羞かしさも能りて、八彌は情ぞ知る武士なり。八彌の樣子を特くと見終り、信行は微笑としながら、勝、勝と呼べは、賓客の酌にとて立たせし女子達が中に、今銚子の酒替へんと立ち掛る十八九の振袖が後姿、何氣なく此方を向くを此處へと招き、空炷の香恐づ〱八彌が後邊に近づき、優やかに手を突いて信行を見上る柳の眉を見遣り。勝、其方に良き夫を持たす程に、心して飽きられまいぞ、この八彌が今日より其方の夫と云へば、氣の抜けしやうな顏色して信行を見るも無理ならず。雨夜の品定めには何時も〱も出ぬことはなく、文といひ、武といひ、容姿骨相猛くなく、弱くなく、威厳うて荒びもせず、あの涼げな眼付が情深き印と、頭より下婢まで誰一人惡く云はぬ八彌。その殿を寢耳に水のわが夫にせよとは、夢の夢行く緣結び、現に上氣して幻のやうに嬉しく、又耻かしく何となく恐ろしければ、お勝我れ知らず八彌の側を一ト膝離れヒるに信行笑ひながら氣に入らぬかと嬲り掛けて重ねて承知かと云へば、お勝言葉はなくて上け得ぬ顏疊に附るを不承知なき返辭と獨り頷く信行、梅櫻一ト枝づゝ膝近に咲かせし心嬉しく、今日は賓客達を媒助に賴み參らせ假の盃事に式を終り、婚禮は八彌が云ふ如

く重ねて良き辰を待つへしと云ふ詞も切れぬ中に、お勝が朋輩の誰彼れ良縁羨しく、銚子土器取り揃へてお勝が前に膝突き付け、蓮葉ものゝ妬さも雑へて聞き覺えの盃の取遣り、先づ嫁御さまよりと土器突き付けられ、お勝振へる手先に受けて一杯注がれしを意路悪るなど怨めしく思へど、扨睨みて遣る顔を擡け得す、呑まぬ譯にはと通らぬ咽喉制つて流し込み、返せし土器の八彌の手に渡る頃には、酒のみの韓紅かは、何物の手傳ひか夕日眩ゆき紅葉林より赤うなりて、四邊霧深く眼は翳み何事もよくは見へす、長々と延す頸元の白粉の斑らを人悪な朋輩に見られ、部屋へ歸つて嬲らるゝ種になりぬ。

文林

海邊花　　東久世通禧

いさりするわまの鹽衣この頃は
さくらかさねに匂ひけるかな

殘雪　　黒田清綱

嵯峨の山千代のふる道わしたつの
わとなかからにも殘る雪かな

伊賀局　　師岡　正胤

手弱女のかけしよしのゝまろき橋
　きゝわたるさへをゝしかりけり

うるはしきもの　　井上　頼文

黄金もてつくれる大刀にむらさきの
　くみをしでゝそとこにおきたる

清少納言　　光岡　正彰

讀みつくす言の葉色も添めきて
　をかしさまさる筆のあとかな

暮山雲　　木村　啓

飛ひかへる鳥はねくらにしつまりて
　雲も尾の上にかへる夕くれ

新年宴會の記　　林　甕臣

「ふるき人どち逢へるなりけり」、と堤中納言がよまれけんおぼえて、げに新しき年むかへたるばかり、嬉しきは無かりけり。さるは、雪ふゞき風こぼれりし冬の日は、さし並の隣の家にだに、言どひせで冬籠りたりしを、年かへりては、雲ゐなれ遙けく住みなしゝ人々も、一つ筵にかくまどゐして、かたみに齡加はゝれるを言ほぎかへりつゝ、目さむる心ちせらる。さてうたげやの名は、星が岡の茶寮とぞよびける。日枝の宮ゐのかたはらなれば、らうがはしき衢わたり避けて、かう〴〵しう。世ばなれたり。南おもての庇、きり岸にのぞみ、高う聳ゑたる所なりけり。千里の外まで、遠じろく見わたさる。名におひて、家の造りざま。

かの茶の湯とかを、ものせんすぢに便りをかしく、世に見えぬさまに、しつらひなしたり。庭のたゝずまひも、わざとならずことそぎて、名も知らぬ深山木ども、景色あるさまに植ゑわたし。立て石すいがいの便りなど言ふも更にて、思ひも筆もおよぶべくも有らずかし。とかう打ながむる間に、いと匂ひやかに、らうたき未通女どもの、數知らず出で來て、破子銜いがさねやうの物など、居ゑわたすなり。瓶子とりまかなふさま、世のつねのざれくつがへる類ひには有らで、さる方には遠くも離れてけはいあてに、しづまりてなんふるまひなしたりける。土器かぎりなくめぐりぬれば、心人皆の隔てのみかは、かしこまりさへ置かずありゆき、興に入ること、譬へんにものなし。あるは、碁打かこみて勝ちはこれるあり。あるは、硯とり寄せて、筆とるあり。扇はかなう打ならすあり。さては歌よむ人、さはにものしつれば、興ある歌ども、あまた有りげにて、聞さしたるやうなりつれど、いたう醉ひしれて、何ごともえおぼえず。たゞおのれが腰打れのみは、吾かの心ちのまぎれにも、しかすがに忘はてぬが、二つばかりあり。

彥星の星が岡なる名にあえて
　年に一たび逢へるなりけり

こは、去年もこの岡にて、新年の宴會したりしを、思ひ出でつるなり。星合にはものどはしとて、笑ふ人もあれど、なほこりずまに。

星あひのあしたの空にあらなくに
　わかるゝをしきこのまとゐかな

雜報

●あなおそろし　讀賣りの古き句調にはあらね
ど、處四ッ谷の何町とかいへるに、今は某の北の
方と呼ばれ給ふ、御方なんありける、學の道は萬
に亘りて、さる女學校の卒業生におはすとか聞き
ぬる、世の風潮に趁はれ給へるにか、將ひた好み
に好み給へるにか、こよなく小說をすかせ給て、
他事なくおはせしが、或日の事なりけり、貸本屋
來りて、命せに從ひて、この、ものゝ本を持ち參
れりとて、置き去りぬ、折しも北方の留守にてあ
りければ、姑の君が、何心なくそを受取りをかれ
ぬ、さる程に、北の方は歸り給ひて、姑より、貸
本屋のかゝる本をなん置きて歸りぬる」といふを
きゝざま、うち守りて居給ひけるが、こはおのが
あとらへおきぬる書籍とは異なり、といひつゝ、
姑の君に對ひて、母君も母君なり、何とてかゝ
ること樣なる書籍をば、受取り置き給へる六ッ七
ッの幼子にもわらさるべきに、年にもこそよれ、か
ゝるあやまちをなしつゝ、よくもこの年月を過し
給へる事よとて、こちたくうちきためられたりと
ぞ、嫁と姑とは、かゝるすぢのものなりや、ほど
なくそが爲に、黄宗ことゞを渡されて、今はかへ
りて、おのがまゝにふるまひ給へりとぞ、聞くが

まゝを、あなおそろし、

●婦人共立育兒會　白銀も、黄金も珠玉も、何せんに、子に若く寶、世に有らめやも。世には、かゝる此上なき寶を得つゝも、金銀といな寶の乏しきが爲に、可惜子寶をして寶たらしむること能はさるに至らしむる者もいと多しとか。これ育兒會の設けありし所以なるべし。吾人は、つとに此の會のます〳〵盛大ならんことを希ひ居たりしに、同會は、此たび有栖川威仁親王の御息所を總裁に推戴し、鍋島侯爵夫人を會長に仰ぎ、去月廿三日、會長幹事の集會を開き、協議をせられしが、昨今貴婦人の入會いと多く、慈善金も漸次其の額を増加したればとて、貧困の病兒は、幹事の照會を得ば、何時にても醫科大學醫院へ入院を許され、施療を受くることを得せしめらるる由。あはれ、同會員諸氏の心づくし、我が國民たる者、誰か感謝の意を表せざらん。かくてこそ、寶に寶の價あらしむることをえて、國の富强をも益し得べけれ。金銀の爲には、命をさへ顧ざる世の中に、これをすてゝも、子といふ者を思ひ給へる人等の心のゆかしさよ。

●女子の學　女子の學ぶべき事、いと多かるべしと雖、極めて要なる事と、然らざることゝの二つなるべし。育兒、衛生、調理、裁縫等は、高きも、卑きも、ひとしく學はざる可からざる事なれど、音樂、歌文、繪畫、點茶、挿花等は、强、必要の事ともいふべからざるなり。さるを已か衣だに裁ち縫ふ事をなしえぬ身にて、音樂よ、點茶よ

ともてはやし、さま〴〵に心をまどはす女子こそうけられぬ。行くさきうたひ女などの群に入らんとにもあらざるべし。遂には一家の主婦となりて、家政を調理すべき大任を負へる身なり。あらぬ事に、貴重の光陰をな費しそ。

●何れか美何れか醜　西洋人の美とする所と、東洋人の美とする所と、甲の人の醜とする所と、乙の人の醜とする所、各異なる所あるべし。去ば、美醜遂に其の眞を知こと能はさるが如しと雖も、こは唯外形上の事のみ。眞の美醜に至ては、東洋西洋すこしもかはる所なし。何をか眞の美醜といふ。曰く。人心の善惡、正邪これなり。

教の庭

次回よりは寄贈の歌文中より天地人を擇りいで丶天を得たらん人には女鑑三部。地に二部。人に一部。各進呈すべし

禁中梅　増山くに子

九重のみぎりの梅の花さかり
大宮人の袖かをるらん

梅つぼの梅さきしより　木村美津子

九重の霞もかをる春風そふく

加納由良子

提くも袖にうつして歸らまし
み園に匂ふ春の梅か香
久保田りつ子

春の日の光りにめてゝ咲きにけり
大内山の梅の初花
廣田とめ子

宮人のとのゐの袖のかをるまて
御園の梅に春風そ吹く
髙井孟子

九重のみ園の梅は見ねねとも
吹春風にしるくも有哉
安藤すゝ子

大宮の梅の盛や今ならん
千代田の空も香に匂ひつゝ

師岡須賀子

御園生の梅の香りやいかならん
賤か垣ねもあかぬこの花
師岡千代子

色も香もいかにたくひのあかるらん
御園の梅の咲きの盛りは
佐々有鄰子

行路柳

かへりくる花見車のそて口に
亂れてかゝる青柳の糸
松田靜枝子

程遠き春の旅路にゆきくれぬ
今霄宿かせ青柳の影
稻田君子

路のへのしたり柳につなかれて
永き春日をてゝにくらしつ

春旅　佐々有鄰子

大木曾や小木曾の旅も菫つみつはな
ぬきつゝ行はたのしも

紫式部　木村美津子

かゝけてし小簾の雪より北山の
若紫の色そゆかしき　木村彬香

袖におく露を拂ひて石山の
月にあかしの筆やとり劍　廣田とめ子

ときはなる松にかゝれる藤波の
上あき色をなにゝたとへん　大手さよ子

時めける言の葉草もものかはと
露におひかぬ女郎花かな

燕のかたに題ず　佐々有鄰子

こやすの貝もとむる心もあく、しるしの糸をつけしともなけれど、今年も去年にかはらず、軒のいますに、いとなれがほに、みつよつふたつ、飛かふさまの、むつまじきは、めをの燕のひなをもつれて、いつのまにす立せしにかあらん、姿もいつくしく、子を思ふこゝろの、ふかきもあはれなりや、なれし軒ばをすみはなるゝも、さこそ殘りおほからめと、推はかられてなん、

わかあを人におくる文　師岡須賀子

あすさへふらばと、のたまひしより、二日三日つゞきし春雨ははれぬれど、音だにし給ぬは、いかにおはしますらん、この籠の内なるは、今日晴れたるをまちつけて、をさなき者ども、近きあたりの野べにて、あざりえたるにて侍れば、明日の御料にもとて、參らするになむ、すくなきは、鶯のこゑする所なればと、思しゆるし給ひてよ、諸共に物し侍らんには、あふこにて荷なふばかりも、つまれはべらんを、いかでおぼしたゝせたまへや、かしこ

精華

帝國万代の隆運を扶翼すべき、青年をして、忠孝の大義に基き、智能を啓發し、德器を成就し、眞正なる日本武士たらしめんこと、是精華の本領なり、

精華第二號目次

女生徒幼兒募集廣告

來ル四月當校附屬高等女學校小學校幷ニ幼稚園ニ於テ生徒及幼兒ノ入校ヲ許ス詳細ハ當校ニ就キ承合スベシ

明治廿五年三月

女子高等師範學校

東京堂發兌書籍目錄

樞密院副議長伯爵副嶋種臣公題辭　今田主稅君著
頭山滿君序文　鈴木天眼子。太華山人。補正

○○國士摸範　平野國臣傳○○

全壹冊大版
洋裝頗美本
正價四拾錢
郵便稅八錢

慶應義塾大學部講師　小宮山綏介先生輯

近世豪傑譚

全六冊大版
洋裝頗美本
正價壹冊拾五錢
郵便稅壹冊四錢

每月壹回　第二卷二月二十日發兌
半峰居士高田早苗君序文　破天荒齋松平康國君序文
如不及齋市島謙吉君序文　讀賣新聞記者鈴木書編輯

明治豪傑譚

第壹卷第二卷四版出來　第三卷再版出來

全三冊大版
洋裝頗美本
正價壹冊拾二錢
郵便稅壹冊四錢

貴族院議員福羽美靜君題辭　蒼濤宮川孫二郎君編輯
前陸軍教授內藤耻叟君序文

明治新政譚

全壹冊大版
洋裝頗美本
正價拾五錢
郵便稅四錢

法學士鬼頭玉汝先生序文
日本之少年主筆須永金三郎君編著

豪傑をさな物語

全壹冊
洋裝頗美本
正價拾二錢
郵便稅四錢

南豊學人元田直君序文
東方策著者稻垣滿二郎君序文
少年寶庫

日本男兒

佐藤治郎吉君編著

全壹冊
洋裝頗美本
正價十二錢
郵便稅四錢

朝鮮欽差辨事大臣李鶴圭君題字
袖海張滋昉君題詞
增訂四版

作詩訣

松本正純先生著

全壹冊
洋裝頗美本
正價拾五錢
郵便稅四錢

匏菴栗本鋤雲先生題詩　孤松
褧亭蒲生重章先生序文　（訂正三版）
學生錦囊

名家詩纂

片岡政保君編纂

全壹冊
洋裝頗美本
正價拾二錢
郵便稅二錢

國光社發行女鑑特約大販賣

發兌書肆　東京神田表神保町　東京堂書店

國光第三卷第九號

（定價一冊十三錢）（全國無遞送料）

目錄

女鑑第九號目次

（遞信省認可）

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京麴町郵便局へ御振込可被下事○郵便劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若し强て領收證を要せらるゝ方ハ別に證書郵送料御送附の事○未稅の來書ハ一切受取不申候事

女鑑

每月二回發行（五日廿日）

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
全國無遞送料
廣告料　五號文字廿三字詰一行十錢

明治廿五年三月四日印刷
同年同月五日出版

東京麴町區平川町五丁目十六番地
發行兼編輯人　西澤之助
同
印刷人　長屋基彥
同
發行所　國光社

（東京國光社印刷部印行）